

増補 生寫朝顔話

大内館の段

名妓紅弗は李衛公が英雄をしたひ、玉翠蓮は張君瑞が才情をあはれむ。淫奔癡情と笑ふ人ありといへども、立通したる操の誠、美玉の瑕を隠しつべし。爰に鎮西の探題大内多々良之助義興公、祖父の家督を請繼いで、防長豊筑の太守とし、武威西國に輝けり。去頃より義興は、鎌倉に在番あり、本國には後室蘭生の方、女ながらも一國の、政事を預る才智發明。折しも禁廷の詔使玉橋の局、はるく周防へ下向あれば、響應の役目山岡立蕃之允、邪惡を包む衣服の綺羅、相役駒澤了庵は、一家中の儒學の師範、四角四面に四方髪、道を守りて相詰める。玉橋の局威儀を正し、「此頃中宮御所御不例につき、先格の通り、當家の先祖林聖太子より相傳はる、天竺著婆が所持の藥王樹を、御病床に掛置かせられたしとて、暫時借用の御使を蒙り、局司玉橋、勅書を賜はつて下向せり。拜見の上、寶を早々差上げられて然るべし」とぞ述べる。後室はつと手をつかへ、「家督義興は鎌倉在番の留守中なれども、等閑ならぬ中宮様

の御惱、家老中ととくと評定の上、勅答申し上ぐべし」と、仰せの下より駒澤了庵、「何さま禁廷の勅命輕からざれど、申さば大切の國の御寶、一應鎌倉へ急使をたてて通達の上」と、云はせも果てず立蕃之允、「ヤア出過ぎたり駒澤、國家老たる某をさし置き、是非の裁配片腹いたし。へにも知れぬ御惱をば、べんく」と鎌倉まで問合せに遣はし、若し其内に御登還あらば、違勅の科は何所へかよる。馬鹿者の思案間にやは合はぬ」と、權威を甲にやり込むれば、こらへぬ了庵膝立て直し、「國家の浮沈にかよる御寶、念に念を入れる某、忠義の道に遠慮は致さぬ。殿の御目鑑をもつて儒臣たる拙者を、馬鹿者とは舌長なり」と、既に珍事に及ばん氣色、園生の方押しなだめ、「兩人共院使の御前なるぞ、私のあらそひ無用」と、制し止めて局に向ひ、「勅詔の趣畏り奉ります。寶藏より取出し、とくと改め差上ぐるまで、奥の亭にて暫く御休息」「チ、早速の領掌、チ、神妙々々。一時の間も知れがたき君の御惱、違背なく差上げられよ」と、詞すくなにいひ渡し、局は立つて入りにけり。園生の方兩人に打向ひ、「勅命とあれば違背もなるまじ、自は藥王樹を改め、お局様へ差上けん。併し我子義興事、うすく聞けば鎌倉にて遊所通ひ、諫言する程の者を手討にすると、家老冷泉帶刀より申し越す。何卒本國に立歸り、早々歸國召さるゝ様、計ひ頼む」とありければ、駒澤了庵頭を下け、「ハア御尤の

御意、お聞に達せぬ其内と、家中の内器量を見立て、幾人となき御諫言に遣はせども、皆御手討になさるゝゆゑ、只今は誰あつて参る者も候はず。某が一子祥一郎と申すは、幼少より我儘放埒ゆる勘當仕る。又一人の甥宮城阿曾次郎と申す者、若年ながら一器量ある者、かねて拙者が跡目彼にゆづりたき念願、此儀御免あるにおいては、早速呼下し、鎌倉へ御諫言に遣し申さん」と、願へば玄蕃嘲笑ひ、「ハ、ハ、ハ、ハテ仰々しい諫言呼はり、いまだ御簾中とてなき我君、御勤仕のお氣晴し、折節の御遊興はどの大名にも皆ある事。夫に何ぞや、今も山が崩る様に、度々御諫言申すがゆゑ、却てお氣が逆立つてのお手討、其儘打やつて置くが上分別」と、さよゆる心の下巧。園生の方引取つて、「ア、イヤ、豊前の大友滅亡の後には、其殘黨家の隙を窺ふ者少からず、蟻の穴より堤の譬、義興が放埒打捨て置いては、將軍家の御咎も計りがたし。了庵が願に任せ、阿曾次郎とやらに家督申し付くる間、早々呼びよせ鎌倉へ遣はせよ。玄蕃之充はお局様のおもてなし、此後とても私の遺恨を差しはさまず、家の長久頼むぞや」と、物和らかに言ひ渡し、入らせ給へば駒澤山岡、はつとお受は申せども、心隔つる忠不忠、玄蕃は奥へ了庵は、屋敷をさして立歸る。既に其日も入りあひの、たそがれ時の暗紛れ、庭の古井をぬつと出で、傍を見廻し呼子の笛、相圖と見えて山岡玄蕃、一間を立出で見合す顔、

「玄蕃様」「コリヤ、シイ、音高し赤星運八。シテく首尾は何とく」「ハ、アお氣遣ひなされ
ますな、寶藏へ忍び込み、盜取つたる靈符の尊像、イザお請取り」と差出せば、「チ、出かいた
出かいた。ソレ當座の褒美」と懷中より取出し、渡せば取つて押しいたとき、「チエ、忝い。
此上は豫て申合せし通り、鎌倉へ立越え、何かの様子は跡より申上けん」「チ、いかにも、岩代多
喜太と心を合せ、大内之助を馬鹿者に仕立上げ、將軍家より咎の來るやう、殊に駒澤了庵めが甥
とやら、近々諫言に下る様子、必ずともぬかりなき様、コリヤかうく」とさよやけば、「ハ、
ア委細承知仕る。然らば此儘拙者はお暇」「チ、家中の者に見付けられぬ様、忍べく」に運
八は、うなづきく氣をくばり、表をさして忍び行く。玄蕃は御寶懷中へ、隠す間もなく奥
の方、「御立ちざふ」と口々に、呼はる聲に鉦乗物、御庭先へかきすゆれば、早御立と館の後
室園生の方、玄蕃もろともひれ伏せば、うやくしくも藥王樹を、袖にさよけて玉橋は、しづ
しづ一間を立出づる。園生の方しとやかに手をつかへ、「お局様には遠路の下向、御苦勞に存
じます」と、敬ふ詞に局玉橋、「チ、見送り大儀。いづれもさらば」と、ゆふばえの胸の善惡
しら綾も、雲に色ます緋の袴、かよけて移る乗物を、早かき出す仕丁ども、列を揃へて出でて
行く。

松原の段

周防の國山口は、北に嶮岨の山をひかへ、南は名高き大灘にて、多々羅の濱へ打ち寄する、波風あらし小松原、夜も早初夜にちかづけど、やどりさだめぬ野伏の、菰引かぶりあたりをながめ、「つくぐ」思へば我身ほど、淺ましい者があらうか。大内の家老駒澤了庵が一子とも云はれし身が、我まゝゆるゑに親の勘當。何卒一つの功を立て、それを土産に歸參の願ひと、思ふに任せぬ身の不仕合せ、非人とまで落ちぶれて、心を盡すかひもなき、淺ましの身の上」と、先非を悔み居たりける。折しも聞ゆる數多の人音、何事やらんと菰引かつぎ、木蔭へこそは身をひそむ。程なく來る供廻り、乗物立つれば此方より、覆面したる怪しの男、眼燈てらしちかぐとあゆみ寄り、「お頭首尾は」と呼はる聲に、乗物より立ち出づる白髪の老女、あたりを眺め、「チ、山蛭か、氣遣ひしやるな首尾は極上」「チ、出來たく。おりやモどうあろと案じ迎ひに來やんしたが、亡れ聞いて落付いた。片時も早う摩耶が獄へ」「ア、コリヤ、壁に耳ひそかにく。シテ元船は」「多々羅の入江に繋いで置きやんした」「そんならそちは、手下共を連立つて、先へ待つて居や。何かの符牒は元船でせう」「チ、合點でござんす。シテお頭は」「チ、そろく

と跡から行く。早うく」に心得て、白丁著ながら烏帽子のゆがみ、亂るゝ國の騒ども、長柄長刀振りかたけ、元船さして伴ひ行く。跡に老女はしたり顔、寶取出し打眺め、「大内の重寶藥王樹、首尾よく我手に入るからは、大望成就疑ひなし。此上は大内を亡し、大友の家名引興し、其虛によつてあはよくば、一天四海を、ホ、ホ、ホ、ホ、」と、獨笑してしづく、と、入江をさして行く形振、怪しくも又不敵なり。木蔭をそつと以前の非人、立出でて跡打眺め、「ム、ハテ怪しき老女が今の振舞。ム、まさしく國家を望む曲者、住家は慥に摩耶が獄。ハテナ」と、心でみなづき蕤脫捨て、見えがくれにぞしたひ行く。

宇治の段

武士の、八十宇治川と名に流れ、底の濁りも夏川や、水の緑も涼しけに、風吹き渡る宇治橋の、往來も繁き五月頃、螢狩にと來る人の、足休めやら氣はうじの、花香はこよか一森や、貴賤老若差別なく、たぎる茶釜の湯氣に立つ、名さへ出花の通圓が、店は人絶なかりけり。かゝる所へ立派の武士、出老伴ひ小吹筒破子肩に打ちかけ是も又、床几をかりの足休め、腰打ちかけて膝ならべ、「何と月心老、拙者國元より京師へ上り、儒學修行の内、ふと嵐山にて御意得しが縁

となり、今では竹馬の友同然、あれこれと誘ひに預り、初めて見物する宇治の里、山の姿川の
流れ、又格別のながめでござる」「ヲ、宮城氏の仰の通り、袖ふり合ふも他生の縁、イヤモ心隔
てず御申しあるゆゑ、愚僧も風雅の友を得て祝著に存ずる。是より平等院へ参詣し、頼政の古
跡扇の芝を見せ申さん。しかしかう見晴した景色を題にして、一首所望」と乞ひければ、「ハ、
ア拙者もをこがましながら、ふと浮んだる一首の口ずさみ、腰折なが御添削」と、用意の短
冊取出し、矢立の筆のはしり書さらくと書認め、出せば月心手に取上げ、「エ、ナニ諸人の
行きかふ橋の通路は、肌涼しき風や吹くらん。ハ、ア面白き此夷曲歌、古今の本歌を取りしは
秀作々々。實も涼しき風薫る、夏なき宇治の夕けしき、類あらじ」と打吟じ、かたへに置けば
さつと吹く、風にまかれて短冊は、ひらりくとひらめきつと、川邊の船へちり込みけり。月心
驚き、「ヤ是はしたり、折角の秀逸を風に取られたり。慥にアノ船、取返さん」と、立つを宮城
は引きとどめ、「ハテ戯れの口號、御捨置き下されう」と、止むる折しも御座船の内ぞ床し
き葭障子、透間洩れ来る三味の音、ウタしたひきて慕ひよるべの螢さへ、妹背かはらで逢ふ夜
半を、重扇の風薫る、匂ひをしたふ蔦かづら、ながき契やつくも髪。「ハテやさしい調、聲と
いひ曲といひ、藝能器量も揃ひし美人ならん。ア、惜むらくは傍に居て、聞かざる事の残念」

と、いふに月心打笑ひ、「ハ、、、日頃物堅い貴所も、アノ音聲には泥まれしな。ヤそれは格別先達ても申す通り、拙僧が和歌の友、秋月弓之助方へ貴所を入家させ申さんと、豫て咄し置きしが、先にも懇望貴所も承知、近々日を見て見合致させ申さん。イヤ是はしたり、大事の法用をはたと失念致した。ヤ無禮ながら拙僧は、是より直に興聖寺へ参り、後刻菊屋方にて御目にかゝるでござらう」然らば必ず旅宿にて相待ち申す。先それまでは「おさらば」と、互に契約月心は、寺をさしてぞ急ぎ行く。御座船は障子引明け、「申し／＼御寮人様、まだ暮果てぬ夕けしき、テモきれいなこと。チト三味線止めて御らうじませ」と、何心なく顔さし出す、舳に以前の短冊、乳人淺香は手に取上げ、「コレ御らうじませ、何所やらから短冊が船へちり込みました」と、渡せば深雪手にとり上げ、「諸人の行きかふ橋の通路は、はだへ涼しき風や吹くらん。ホンニやさしい此つらね、曇つぎといひ手跡といひ、誰が口ずさみぞ床しや」と、見やる陸には阿曾治郎、思はず見合す顔と顔、互に見とれる目の中に、通ふ心をいは橋の、渡してほしき思ひなり。かゝる折から川邊傳ひ、浪人めきし二人の酔どれ、何の會釋のあらけなく、船へ飛込み深雪が傍、尻引きまくり大あぐら。淺香ははつと深雪を圍ひ、「どなたかは存じませぬが、女ばかりの此船へ、何の御用でござります」「エ、何の用とはさりととは不粹。今橋向ひの

料理屋で一杯きめこみ、橋の上から聞いて居れば、どうもいへぬ諷ひかたちや。酒の間をしてやらうと、思ひ思うて押付客、お娘の盃いたどかう」と、すつかりいへば淺香は興覺め、「ムム女ばかりとあなどつての狼藉か、不肖ながら藝州岸戸の家老、秋月弓之助が息女の遊山、妨けしやると爲にならぬぞ」と、威せばいつかなせよと笑ひ、「ハ、ハ、ハ、ハ、弓之助でも鎗之助でも、カウ乗込んだらすめではないなぬ、四の五の云はずと娘と酒もり、いやとぬかせばどいつもこいつも、縛り上げて念佛講ぢや」と弱みへ付込む傍若無人、憎しとみやぎ阿曾次郎、船へ立入り詞を和らけ、「コレハくお若い衆、酒機嫌でざれ事か。此船は拙者が預りの女中客、得しれぬ他人と酒宴は致させにくし。餘の船へござれよ」と、いへば二人は目をむき出し、「ム、女ばかりとアノ幻妻がぬかしたに、われが預りの客とは、エ、そんな古手な事で行くのぢやないぞよ。悪くしやれるとコリヤかう」と、いひさま掴む胸づくし、逆手に取つてぐつと捻上げ、「ヤア云はせて置けば様々の狼藉、手向ひ致さば酒のかはり、水喰はぬ内早く歸れ」と、右と左にもんどり打たせ、脊骨も折れよと刀の胸打、りうくはつしと打ちのめせば、「アイタ、タ、イヤモ痛入つたるおもてなし、最早御免」と四つ這ひに、岡へやうく這上り、跡をも見ずして逃歸る。つどいて追はんとゆく袂、深雪は押止め、「ア、コレ申し、どなたかは存じませぬ

が、危い所をあなたのお蔭、何とお禮を申さうやら。ノウ浅香」「ハイ、イヤモ此禮がちよつきりちよつとは申されませぬ。幸ひ有り合ふお盃、何はなくとも酒一つ」といふを押へて、「ア、イヤ、必お構ひ下されな。拙者も待合はす人がござれば、早お暇」と立つを浅香は引きとどめ、「女ばかりの此船中、又どの様な狼藉者がこうも知れませぬ。ながうとは申しませぬ、船頭の戻るまで」「ム、左様に仰せらるゝを、おして歸るも心なき業、然らば船頭の歸るまで」「アレ申し、居てやらうとおつしやるわいな。ソレ御寮人様、ちやつと其お盃を」といへば、深雪は顔打赤め、「思ふに任せぬ船の内、お慮外ながらお盃を、戴きましたらいかばかり、お嬉しう」との其跡は、いはでの山の岩つゝじ、あたりまばゆき風情なり。「コレハ、痛入つたる御挨拶。先刻承れば岸戸家の御家老、秋月弓之助殿の御息女とや、我等宮城阿曾次郎と申す者、お馴染の爲頂戴」と、呑んでさいたる盃に、深雪は嬉しさ押しいたどき、云ひたい事も人目の關、しんきらしけに浅香をば、見やれば呑込む通りもの、「ヲ、此船頭衆は遅い事、娼衆と連立つて、そこら見物がてら見て参りませう。阿曾次郎様とやら、しばしの間御頼み申します。ソレ御寮人様、随分と心残りのない様に、ナ心一ぱい御馳走を。ドレ一はしり」と氣を通し、皆皆引連れ上り行く。阿曾次郎はつきほなく、見廻す傍に我が短冊。「ム、コリヤ先刻風に取ら

れし拙者が腰折、スリヤ此お船へ」「アイ、ちつて來たのが縁のはし、お慮もじながら此扇に、何なりとちよつと一筆」「コレハく結構なお扇子、ム、金地に朝顔、テ見事。およばぬ我等が拙筆に書汚すは、ぶしつけながら」と有合ふ硯、上代やうの走書、墨の色香に引かざるよ、心深雪は嬉しけに、押戴いて打詠め、「ホンニ御手と云ひ唱歌と云ひ、かはゆらしい朝顔の歌、一生放さぬ私が守り」と、云ひつゝ其身も筆取り上げ、用意の短冊取出し、妻を戀歌のもしは草、墨つぎ早く書認め、「おはもじながら」と指出せば、宮城も興じ手に取上げ、「ム、ナニ、戀ひ慕ふ、心通はす風もがな、人目隔つる君があたりへ。ム、スリヤ見る影もなき某を」「アイ、ふと見初めしが思ひの種、不便と申うて給はれ」と、じつと寄添ひ抱付き、直に障子をしめからむ、松に這ふてふ藤かづら、いかなる夢や結ぶらん。折からいきせき奴鹿内、彼方此方をうろうる眼、「阿曾次郎様く、阿曾次郎様ではごはりませぬか、國元より急御用」と、呼はる聲に阿曾次郎、はつと驚き深雪をば、なだめすかしてとつかはと、船より岸へかけ上り、「ヤア汝は留守を預けし鹿内、あわたしく何事なるぞ」「サレバく、御本國より火急の御狀」と、渡せば取つて封押切り、讀下して大きに驚き、「コリヤコレ伯父了庵より、家督を受繼ぎ鎌倉へ下り、殿へ御諫言致しくれよとの儀。ハ、ア大恩ある伯父者人の頼み聞捨てがたし。コリヤ鹿内、其

方は先へ立歸り、りよしめく 旅宿を片付け發足の用意せよ。急けく」に「チイく、畏まつた」と達者も
 の、宙をとんで引かへす。引きつゞいて阿曾次郎、立歸らんとかけ出すを、「なうこれ待つて」
 と、深ゆきは船より駈け上り、「コレ申し阿曾次郎様、云ひ残した事も有り、せめて今宵は此船
 に」と、取付き歎けば、「チ、尤々さりながら、聞かるゝ通り火急の御用、最前扇に認めし、朝
 顔の唱歌を我と思ひ、廻りあふ時節を待たれよ。さらば」とばかり袖ふり切り、行かんとする
 を猶とりすがり、「マアく待つて」ととどむる折しも、淺香は船頭引連れて、川邊傳ひに戻り足、
 かくと見るより押隔て、「コレ申し深雪様、淺からぬあなたのお情、御禮の足らぬはお道理なれ
 ど、人の見る前又重ねて、御禮申す時節もあらう」「イ、ヤ申し阿曾次郎様、主人の名は秋月弓之
 助、必ず御出でを待ちまする」「ム、某宅は下川原、程遠からねば尋ね申さん」さらばく
 と船と陸、別れの涙かなしさに、見返る深雪を無理やりに、船へ伴ふ其所へ、「コリヤやらぬは」
 と以前の惡者、あらはれ出でて阿曾次郎が、右と左にむしやぶり付く。「シヤ面倒なと振りほ
 どき、直にざんぶと水煙。船はもやひをとくく」と、漕出す船子妹と背の、遠ざかるこそ是非
 もなき。

眞葛が原の段

我戀は松を時雨の染めかねてと、慈鎮和尚が言葉の種、眞葛が原の片邊り、風爐に常釜かけ床几、茶代一服一錢が、店は風雅の捨所、丸山戻り色酒の、酔をさましに来る客の、中に目じゆんだ京羽二重、見えは作れど懷の、薄茶吞みゐる茶釜、逆に立花桂庵とて、匕より口のよう廻る、判官ごのみの辨慶醫者、しかつべらしく茶碗さし置き、「イヤコレお由、けふは壽貞尼は何所へ赴かれた」「ハイ、お家様は大阪のお客で、正阿彌へ参られました」「ム、風の神ではなうて正阿彌へ付けこまれたか」「ホ、、、又桂庵様の久しい口合。おまへは又どこへお出でだへ」「イヤ下拙は八百八十軒の病家廻りを仕舞ひ、餘りほつとしたゆゑ、井筒で一世界、藝子どもにもりつぶされ、お輕ぢやないが醉さまし、風に吹かれに罷りこした。ソレハともあれ、此店へ年の頃は三十一、色黒ででつくりと背の低いお醫者が、下拙を尋ねにはわせなんだか」「イエそんなお方は見えませなんだ」「ハテナア、もう來さうなものぢやが。ワ、向ふから來るがさうぢや。イヤコレおよほ、アノ仁とチト内證の咄もあれば、そもじは暫らく勝手へ」「アイアイ合點でござんす、用が有るなら手を叩いて下さんせ」と、お由は勝手へ入りにける。「ハテサ

テ埒のあかぬ歩行やう」と、見やる向ふへ萩の祐仙。それと見るより、「オ、イ、祐仙様、先刻より白鷺が火事見るやうに、首長うして待つてゐるに、さりとては戀路に不精」といふに祐仙腰打かけ、「イヤモやつがれも心は急いたれど、よんどころなき朋友に出合ひ、端の寮の書畫の會、それから快々堂で下らぬ薄茶一服、やうく抜けてたつた今。何は扱置き、豫て尊公に頼んだ秋月弓之助の娘、仲人せうと尊公の請合、仕持料の三十兩、ソレ相渡す」と、出せば受取り懷中し、「ハア慥に落手。先方にも承知なれど、爰に一つの難儀といふは、先方は武家方ゆゑ、醫者を掣にはとらぬ様子。元月心といふ出家が、宮城阿會次郎といふ男を仲人せうと云入れ、大抵二親の注文には合うたが、下拙は彼の秋月へ立入するゆゑ、どうぞ阿會次郎の人品國所を聞合はしてくれとの頼。コレ尊公の戀のかなふ前表なり」「シタリ」「然る所彼の阿會次郎は、色白く厚鬚の當世男、尊公は總髮、此一條に下拙も色々心を碎き罷在るてや」「エ、それが何の心を碎く事。アノ娘ゆゑなら、元服はおろか坊主になつても苦しうない。自他とも仲人頼み入る」「ム、そんなら祇園邊の髪給床で急に元服」「チ、合點」と祐仙は、轡に上ずり氣もそごろ、床をさしてぞ走り行く。跡に桂庵思案顔、「マア三十兩は著服したが、もつときやつを磨りおろす妙計がありさうなもの」と、もくろむ折しも下女お由、鍋を片手に立出づれば、桂庵

め早く、「ム、およしえ、其鍋おれに賣つてくれまいか」「エ、めつさうな。これは内の菜鍋、しかし直打次第で賣りもせうが、何ほに買うてぢや」「ム、張込んで銀一に買をかい」「めつさうな」「そんなら貳朱々々」「イエくもそつと買うたく」「エ、そんならてんほの皮、壹歩々々」「ム、壹歩なら負けても上げう。が此鍋買うて何にさんす」「何にせうとも、細工は流々仕上を御らうじ」と、小柄を抜いて丸盆へ、穴のあく程鍋炭こそけ、手早く紙に押包み、「是でよしよし、サア一步。必ず此事他言無用。又外に頼む子細、高うは言はれぬ、コレかうく」と耳に口、「ム、そんなら其鍋炭をふりかけたら惚れたふり」「コリヤ聲高し、内に忍んでよい時分に、首尾よういたら又壹歩。ハテ何にもいふな」と兩人が、うなづきあうて内へ入る。そり立あたまの烏毛立ち、延びた鼻毛を拔出しの、鬚よりたらく油汗、いきせき戻る萩の祐仙、桂庵見るよりあふぎ立て、「イヤ似合ふたりく」とんと片岡我當生寫し、奇妙々々。シタガ、少しの難は鼻が獅子舞、目が下り目、是ばかりが玉に瑕」「ム、ひよつと彼のお娘が嫌ひはせまいか」「チツトそこらはぬからぬ、下拙が家傳の惚藥、即爰に所持致す」「ナニそれが惚藥とな」「中中。海に千年山に千年、三千年功を経しいもりの黒焼、ぱつくと振りかけると、小野の小町の様な堅造でも、するくべつたり惚れるが妙。併し代金は拾五兩、お望なら御手に入れませ

うか」「イヤモお娘のほれるに違なくば、拾五兩が廿兩でも入用々々。卽是に十五兩」「ム、さ
らばさしあけのしたし物」と、鍋炭渡し金請取り、相圖のしはぶき咳ばらひ、それとおよしが
汲んで出る、目元の鹽茶さし出せば、祐仙は是幸ひ、惚藥の試みと、振りかけられておよしは
うつとり、「チ、いつの間によい殿ごにおなりだへ、つんともうわしやあなたを我當かと思
て、首筋もとからぞつとして、わたしや戀風引いたさうな」と、傍へ寄添ひ祐仙が、ふと股ふ
つつり。「アイタ、アイタ、、、エ、何とする」「エ、何ぢやいな、何とするとは下心の悪
い。目もとなら鼻付なら、どつこに一つ惚氣のある、あた好らしい」ともたれしは、達磨人形
にのら猫の、しなだれ付きし如くなり。祐仙は藥の利目と、一途に思ふ悦び顔、「テ妙藥も有
ればあるもの。終に女にかやうな事、臍の緒切つて覺えぬやつがれ」「エ、何ぢやいな、人にば
つかり氣をもませ、藥の咄し聞きたうない。内太股がうぞついて、こたへられぬ」といだし付
く。「是はあんまり利過ぎた。桂庵、頼む」と逡廻るを、やらじと追うて行くふごじり、にける
出しりに桂庵も、腹をかゝへて「ハ、、、ハ、、、ハ、、、」三重したひ行く。

岡崎の段

名にしおふ花の都の片ほとり、聖護院の町はづれ、風雅を好む一構、主は秋月弓之助、元は藝州岸戸の功臣、暗き主君を諫めかね、仕を辭せし浪人の、身退きたる氣さんじは、作りそだつる朝顔の、世話に心を慰めける。妻の操は一間を立出で、「申し我夫、早朝より花のお世話、懽お氣が盡きませう、マアお休み」とたばこ盆、夫思ひの眞實心。「チ、奥、よく氣が付き申した、さらば一ぶく仕らう。何と奥、身が手作りの朝顔、見事ではおりないか」「さればいな、今朝はいつよりも花がたんと咲きました、が申し此朝顔の花に付いて氣にかゝるは娘の深雪、もう時分のきた者を、一人置くは病氣のもと、どうぞよい聲を取つて、早う初孫の顔見やうとは思さぬか」「ハテそこに如才が有るものか。元身共は岸戸譜代の家臣なれど、當時の主君、お蘭のかたといふ側室に迷ひ、其弟の蘆柄傳藏といふ匹夫を取立て高祿をあたへ、剩へお蘭の方のすゝめによつて、我娘に傳藏を娶せよとの儀。系圖正しき娘深雪、匹夫下郎の成上り者を聲に取るが胸悪く、亂邦には入らずといふ古語に従ひ、仕を辭退し浪人住居も、元はといへば娘が不便さ。それゆゑあれはと聲を聞合せしに、立入の醫者立花桂庵、似合の縁談申來りしゆゑ、とくと筋目を聞糺せば、是も元は中國武家の生れ、名は宮城阿曾次郎とやら、人品は申すに及ばず、萬能に達せしとの儀。それゆゑまづ客分に呼迎へる約束致いた。今日は吉日ゆゑ、桂庵

が彼の阿曾次郎を同道する筈。女どもに申付け掃除萬端云付け召され」と、語る夫の言の葉に、
 操も心落付いて、「ソレハマア目でたい事、それなればとうからさうとはおつしやらいで、私
 一人が物案じ。女どもや乳母も云付けて、髪のかざり小袖の色品、問談合もせにやならぬ」「チ
 ナそれが肝心。身は圍にて薄茶一ぶく、お身も相伴しやれい」と、夫婦打連れ入りにけり。か
 くとしら齒の娘氣に、こがるゝ人をくよくくと、思ひつゞけし亂れ髪、過ぎにし宇治のあだゆ
 めも、風に破れし戀衣、深雪は居間を立出でて、あたり見廻し獨言、「ホンニ任せぬ浮世とて、
 たまぐ逢うた阿曾次郎様、心のたけを云ふ隙も、情ないはお國の迎ひ、周防とばかり行先の、
 當所知らねば文さへも、言傳やらん便なく、是程こがるゝ心根を、直に云ひたい知らせた
 い。逢はれる傳はない事か」と、そのまゝそこに打ちふして、聲も得上げず忍び泣、娘心ぞい
 ぢらしき。始終うかどふ乳母淺香、納戸の口を立出でて、「コレ申し深ゆきさま、一昨日宇治
 より戻つてから、何やらしめぐと思ひありけな顔持、ちひさい時から育てた私、何の遠慮
 に及ぶもの、あかして云うて下されませ」と、眞實見えし言の葉に、深ゆきは涙押しかくし、
 「チ、乳母とした事が、何のそなたに隔心があるぞいなう。ありやうは螢狩に、ふつと見初め
 た、ア、イヤふつと風に當つてから、エ、モしんきでくならぬわいの」「チ、それは風を引か

しやんしたのである、しかも戀風といふおもい風を」「ヤアそんならそなた知つてゐるやるか」「チ、知らいで何としませうぞいの。楓にうすく聞いた上、おまへの居間に有つた扇、歌の唱歌は朝顔、手跡は宮城阿曾次郎殿」「エ、」「サ何と違ひはござんすまいがな。其阿曾次郎殿を戀ひこがれ、それゆゑの物案じと、私はとうから知つて居ます。ガ、コレ、お案じ遊ばすな、お前にいうて悦ばす事が有る」と、いふに深雪は傍に寄り、「ム、私に悦ばす事とはえ」「サア外でもない、けふおまへに聲様がござる筈、何と嬉しいかえ」「ヤアわしの聲とはソリヤ何人、わしやそんなこと聞きたうない、云ひ出してたもんな」と、ねぢ向くそぶりつくく見て、「ホ、ゝ、わけも聞かずにそりや何事、出入の醫者桂庵殿の仲人で、くる聲がねは宮城阿曾次郎殿」と、聞いて深雪は二度悔り、「ヤアく阿曾次郎さんがござんすとは、ソリヤほんのことかいなうく」「チ、何のわしが嘘いひませう。ガかういふ内も心がせく」「チ、それく、そんなら髪も結直し、小袖も相談。サアくサア來てたも」と手を引き立て、悦び勇み納戸口、のれんの内へぞ入りにける。かくて其日も晝過ぎて、隙行く駒のそれならで、岡崎の隱家を、尋ねて爰に來る人は、肩から爪の立花桂庵、似た山聲の祐仙を、「爰ぢや爰ぢや」と手招けば、鳥屋の戸あけてちやほどりの、米見付けたる風情にて、ぱつぱくと

鍋炭を、まきちらしつゝ出で來り、「ア深雪殿のお座敷はもう爰かへ、おりや、恥かしい」と鼻かめば、「エ、そんな初心な事では埒があかぬ。道々も云ふ通り、宮城阿曾次郎を忘れまいぞ」と、云付け置いて門の口、「頼みませう」と音なへば、手襷はつさず飛んで出す、納戸の内より下女のりん、「どうれ」といふも不性なり。「イヤ立花桂庵御見舞」「エ、誰ぢやと思うたら桂あんさん、悔りしたがの」「チ、道理々々、顔見たら猶悔りせう。弓之助殿へ下拙が宮城阿曾次郎殿を同道致したと、サ、傳へられて下されう」と、いふにおりんが心得て、其儘おくへ走行く。下女がしらせに弓之助、衣服改め提刀、操伴ひ一間を出で、「コレハく桂庵老、大儀々々。宮城氏を同道とや、早速に對面したし。イザく是へ」に表へ出で、「萩の氏、アイヤ宮城氏、イザお通り」と、しかつべ顔、返事を何という仙が、今更どうかしき高く、うぢくもぢく入りかぬるを、無理に引張り連れて入る、顔を見るより操はあきれて不審顔、様子あらんと弓之助、「ナニ桂庵老、宮城氏はいづれにござるな」「エ、即お目通りにひかへ居られます」「ム、アノ其仁が宮城阿曾次郎殿とや」「イカニモく正眞取々ぬくくの阿曾次郎殿。ソレ宮城氏御挨拶」と、いへば祐仙扇をぱちく、「いかにもやつがれが萩野、へ、ンへン、イヤ、宮城阿曾次郎、此度は不思議の御縁で、御息女の聲になし下されうとの事、聞くと

其儘病家も打捨て「ア、コレ」聲舅初めての對面に、餘り詞が多過ぎる「ア、イヤ桂庵苦
しうない。シテ宮城氏には、娘深雪を知つて居召さるか」「イヤモウ、知つた段ぢやござら
ぬ。エ、いつぞや當所清水寺、地主權現の花盛り、病家がなさに見に行きしが、薄雪まがひの
ほつとり者、花の帽子に花の櫛、花の姿の花やかさ、首筋元からぞつとして、見とれる内に早
下向、下向せうとてお姿を、目にはながめはせぬものを、残り多さに見え隠れ、此岡崎まで付け
て來て、親御の苗字お娘の名まで、聞合す程の心底男。聲入したら朝寢せず、水も汲んだり飯
も焚く。あんまけんぺき鍼の療治、料物入らずに仕らう」としやべる度々桂庵は、消えも入る
べきじゆつなさに、冷汗流すばかりなり。操は小腹立てながら、なぶつて見んと打ほよゑみ、
「コレハ、ふつゝかな娘を、それ程までに御執心ならば、いかにも縁組致さうが、此方は諸
藝師範の家柄、詩歌俳諧香茶の湯、其お心がけがござりますか」「有るともく。歌は彼の、九
は病五七は雨に四つ日照、六つ八つ騒ぎいつも大風」「イヤ申し、そりや地震の歌ぢやござり
ませぬか」「いかにもく、自身の作、四か五かは存ぜぬが、灰買よりは糠買が、はるか増つては
け口がよう、扱茶に於ては、薄茶綠茶栗皮茶、利休茶こけ茶藍みる茶、こゝらが當世十人向。
香に於ては線香抹香、沈香五種香、御望次第藥種やにて、隨分利口に買廻しは手の物なり」と

ぞしやべりける。「ヤアだまれ、まいす者め。コリヤヤイ、うぬら武士を嘲弄にうせたか」と、刀
 押取りきめ付くれば、祐仙桂庵恂りはいまい、「ア、めつさうなく、全く左様な者ならず、ま
 がひなしの阿會次郎」「ヤアぬかすな。うつけ者とは見て取れど、様子あらんと、窺ふそれがし。
 ヤアく關助、こやつ摘み出せよ」と、呼はる聲にはつと答へ、走り出でたる奴關助、「ヤア
 ヤアさまぐの馬鹿者めら、きりく立つて失せをらう、長居ひろがばぶち放す」と、刀の柄
 に手をかくれば、「コリヤたまらぬ」と祐仙桂庵、命からく逃歸る。弓之助はにが笑ひ、「ハ
 ハ、ハ、ハテ扱々世にはうつけたやつも有れば有るもの、たわいなしめに懸つてはつと退屈。
 關助休みやれ。ドレ一休み」と立上れば、操も共にたばこ盆、提けて一間へ關助も、勝手へこそ
 は入りにけり。寝きたれの、髷のおくれは解きながら、もつると思ひくしくと、深雪がむね
 の亂れ髪、たれにいふべき方もなく、涙に袖もぬれ縁の朝顔の花打詠め、「どうした事のえに
 しやら、ふつと見初めた阿會次郎さま、御國元から急用との、使は戀の障りの雲、晴間の星の
 たまぐも、けふ逢はると思ひの外、待ちこがれたる甲斐もなく、あられもない知らぬ人。
 ほんに思へばあぢきない、暫し別れのかたみにと、書いてもらうた朝顔の、歌の唱歌も我袖に、
 涙の露のひる間なき、歎きせよとの歌占か。宇治の螢となるならば、あくがれ出でて夫の傍、

飛んで行きたい顔見たい」と、かたみの扇身に添へて、抱きしめゝ忍び泣、日影待つ間の朝顔の、雨にしをるゝ風情なり。うしろに立聞くめのと浅香、それぞと察し立寄つて、「コレ申し深雪様、桂庵殿の龜忽ゆるゑ、あはうらしい今の時宜、しんきなは道理々々。シタガお氣遣ひ遊ばすな、此浅香が奥様へお咄し申し、阿曾次郎殿をきつとお前にお添はし申します。くよくよ思つて病氣やなど出たら、親御様へ大きな不孝。氣をしやんと取直して、縁と月日を待つが肝心。マア〳〵奥へ」と諫められ、少しは心晴れかけし、袖の時雨の小止して、夕日てり添ふ蔦紅葉、顔あからめて入りにけり。折から表へあわたどしく、せきにせいてかけ来る武士、音なふ間もなくずつと入り、「弓之助殿〳〵、弓之助殿御在宿か」と呼はつて、尻居にどうと倒るゝ息切れ、何事やらんと弓之助、押取刀に走り出で、見れば覺えの古朋輩、ぬるみ汲みと用意の氣付、口に含ませ氣轉の活、ム、とばかりに氣の付く若者、「ヤア弓之助殿」「ホ、瓜生主水が舍弟勇藏、あわたどしき體心得ず。子細はいかに、様子は何と」はつと勇藏氣を取直し、「されば候、國元には、お蘭の方の威光を假り、成上りの蘆柄傳藏、御前よきまゝ下々へ過役をかけ、金銀を貪りしより事起り、御領内の民百姓、一揆を起し我一と、袖が浦の城廓へ、押寄せゝ追取卷き、無二無三に責立つる。さるによつて御家の騒動大方ならず、早大亂

に及ばん氣色、此騒動をしづめん者、弓之助より外になし、主君の後悔頼みの御狀、片時もはやく歸國あつて、賢慮を廻らしお鎮めあれ。我は此儘國元へ、心もせけば」と云捨てて、元來し道へ引かへす。弓之助は大いに驚き、狀押開き讀下し、「誠に殿の御自筆、先非を悔みし御頼の文體。ハ、ア勿體なし、主家の太亂見捨てん様なし。ヤア、女房娘も歸國の用意、關助參れ」の詞の下、はつと答へて駈出る奴、「お旦那、何の御用でござります」「ヲ、火急に國元より御召の御狀到來せり。今日中に家内を片付け、今夜すぐさま伏見まで發足せん。心得たるか」と云渡し、奥をさしてぞかけ入つたり。俄の歸國に周章混雜、氣もいら／＼とせき助が、何からせんと心のもんちやく。かくとも知らず阿曾次郎、歸國の暇餘所ながら、深雪に一目あひの戸を、それともさすが開けかねしが、思ひ切つてそつと入り、「頼みませう」と音なへば、「エ此せはしいに何者ぢや」「イヤ宮城阿曾次郎と申す者」と、半分聞かず、「ヤア又うせたか、大馬鹿者」とゆふ暮時、顔さへ見ずに突出し、戸を立て切りし人違へ。様子知らねば阿曾次郎、いぶかしながら詮方なく、跡の歎きの種ぞとは、知らず知られず三重別れ行く。

明石船別れの段

わだつみの、浪の面てる月影も、明石の浦の泊り船、風待つ種のとれぐを、慰めかねて阿曾次郎、艫先に立出で月かけに、四方を見はらす氣晴しの、たばこの煙吹きなびく、船路の旅ぞ物淋し。そばにかよりし大船は、秋月弓之助が歸國の乗船、乗人も水主も船草臥、前後も知らぬ高野。娘深雪は只一人、目さへも合はぬ戀人を、思ひこがれてうつくと、戀に心をつくし琴、せめて慰むよすがもと、かきならしたる糸しらべ。ウタ露のひぬ間の朝顔に、照す日かけのつれなきに、「テ合點の行かぬ。アノ諷は過ぎつる宇治の螢狩に、秋月の娘深雪が扇に某が、書いてあたへし朝顔の唱歌、聲さへ深雪に生寫し。ハテいぶかしさよ」と見上ぐれば、あなたも見下すかき立の、顔はまさしく、「深雪殿ではないか」「ヤア阿曾次郎様、逢ひたかつた」と、我を忘れて乗りうつるを、抱きとりて口に手を當て、「聲が高い深雪殿、思ひもよらぬ今の對面、何故に此所に」「さればいな、宇治でお別れ申してより、モ片時忘れず泣暮す内、國元に騷動起り、父母共に俄の旅立。所詮逢ふ事叶はぬかと、何ほうかなしう思うたに、爰で逢うたは盡きせぬ縁、どうぞ此身を何國へも、連れて退いて給はれ」と、ひつたり抱きつきの夜の、影も隔てぬ比翼鳥、放れがたなき風情なり。阿曾次郎も心を察し、「チ、嬉しいそなたの志、忘れは置かぬさりながら、そなたを今連退いては、某が武士道立たず。殊に此度伯父の頼みにて

遁れぬ主用、猶もつて女を同道しがたき入譯、有る縁ならば添ふ時節も有らう。かうして居ては人の咎め、サアちやつと元の船へ乗つてたも」「エ、そりや聞えませぬ阿曾次郎様、添はれる時節もあらうとは、當座遁れの捨詞、お氣に入らずは打明けて、包ますそれというてたべ。もしもおまへに添ふ事の、ならぬ時には淵川へ、此身をなけ死にまする。ふたゝび外の夫迎へ、せぬを誓ひし身の潔白。さらば」とばかり水底へ、既に飛ばんと立上るを、あわて驚き抱きとめ、「コレ待つた、早まるまい」「イエ、放して殺して下さんせ」「ア、ぜびもなし。夫程まで思ひ詰めた娘心、見殺しにマどうせられう。不義徒と世の人口、謗らばそしれ連れて退く。コレ盡未來まで女房ぢや」「エ、嬉しうござんす忝い。そんなら願ひを叶へて下さんすか」「ヲ武士の詞に二言はない。さりながら、此儘に連れて退けば親達の、もしや海川へも身を投げたかと、お歎きあらんは定の物。委しい様子をつい一筆」「ヲ、よういうて下さんした、私もさう思つて居ます。ガどうぞ料紙をかして下さんせ」「ヲ、心得し」と懷紙、腰をさぐつて、「南無三寶、そなたを抱止める拍子、海へ何やら落せし水音、旅矢立をはめてのけた。ア、どうしたらよからうぞ」「ヲ、夫なら待つて下さんせ、二親初め付々まで、旅草臥の寢入ばな、そつと元船へいんで、一筆書置してきませう」「ヲ、それよからう。ガ、コレ、必ず物音させて、親達の目

が覺めぬやう」「心得ました」と立上れば、阿會次郎は肩車、あなたの船へ乗移らす、音に目覺す船頭ども、「チ、地嵐が吹出した。碇を上げよ、帆を卷け」と、騒ぎ出せば、「なう悲しや」とあせる内、船は次第に遠ざかる。コハ何とせん、かとせんと、あせるはすみ阿會次郎が、船へ投込む扇の別れ、跡しら浪を隔ての船、つながぬ縁ぞ三重是非もなき。

弓之助家舗の段

爰に藝州岸戸の家臣、秋月弓之助が一構、生得風流文武に秀で、人に勝れし武士の、都に蟄居しありけるが、國の亂れに召歸され、殿の仰を承り、事治りし其後は、昔に勝る歸り咲、いと美々しくも榮えけり。家の接木の一人娘、深雪は思ふ其人に、たま／＼逢ひし其甲斐もなみの明石の別れより、國へ歸りし其日より、只ぶらくと物思ひ、こしもとはした召連れて、一間の内より立出づれば、中に早枝がしやくり出で、「申し深雪様、此節しめぐと、物思はしいお顔持、チト外でも見てお氣をお晴しなされませ」「チ、よういうてたもつた。さりながら、私が心のしんきさは、月雪花のながめにも、勝るいくせの物思ひ」過ぎし明石の浦浪の、うらめしい追風のかぜ、島がくれ行く戀人の、船をしぞ思ふ思ひをば、誰にいはうぞ語らうぞ。

よくく結ぶの神にさへ、見放されたる憂き身かと、心の内に口説泣、女心ぞいぢらしき。「ヲ何をくよく思召す、親且那様のお歸りに間も有るまい、是から奥の離れ座敷で、楓を相手に琴の組でも遊ばしたら、お氣慰にも成りませう。サアくお出で遊ばしませ」と、娘どもに誘ははれ、心浮かねどしをくくと、是非もなけ首立つて行く。かゝる折から玄關先、「蘆柄傳藏様御入」と、呼はる程もあらくしく、疊さはりも無骨の蘆柄、肩で風切る勿體顔、押柄らしく打通る。かくと聞いてや主の妻、操は出迎ひ會釋して、「コレハく傳藏様、ようこそく。先々あれへ」に上座に著き、をさめた顔に操は手をつき、「夫弓之助殿は殿の御召にて登城の留守、それ故お出迎ひも申しませぬ。シテ只今は何の御用」と、尋ねに傳藏扇を鳴らし、「イヤ只今參る事別儀でござらぬ、當家の息女深雪殿、いまだ定る聲がねもなきよし、幸ひ拙者も無妻なれば、殿へ内々縁談の儀を願ひし處、似合はしき儀と有つて、お蘭の方を以て、弓之助殿へ其越申渡されしに、有無の返答にも及ばず、病氣と云立て御暇を願ひ、國を立退かれしゆゑ、縁談の儀は其儘に相成りしが、此度歸參召されしゆゑ、度々仲人をもつて縁邊の事を申入るれども、酢のこんにやくのと埒のあかぬ返答、それゆゑ今日は直々推參致した。御前まで願ひし縁談違變あつては、此傳藏が武士が相立ち申さぬ。否や應の一口商ひ、只今返答承らう」

と、權威けんりくを鼻はなにてつぺい押おし、小面憎こづらにくさも女氣をんなぎに、じつとこたへて、「ホ、ハ、ハ、コレハマア、見る影かげもない娘を御所望ごしよきうに預あづかるは、何なんほうか御嬉おうれしう存ぞんじますれど、縁えんの事は親我意おやがいきにもなりませぬ。殊ことに夫も留守をすなれば、只今と申しては」「イヤサ、弓之助殿は留主にもせよ、女の子は母次第、其元さへ得心ごくしんあつて、御息女へお勸めあらば、ツイ埒うちの明く事。當時殿の御氣おきに入りのお蘭らんの方は拙者せつしやが姉あね、其弟たる身どもを聲にとられなば、弓之助殿の肩身かたみもいかると申すもの」と、半分聞かず、「イヤ申し傳藏様、身不肖みせうにはござりますれど、娘の縁えんに連れて出世を望むやうな弓之助ではござりませぬ。其一言を弓之助承らば、たとへ娘が得心ごくしん致しても、此縁組はお斷ことわりと申すは定ぢやう。マそれはともあれ、此頃娘は病氣に取合とりあはせますれば、本復の上それとも談合だんがふいたし、否いややの御返事致しましよ」「ヤアぬけく」と其手はくはぬ。誠病氣まことびやうきが病氣でないか、此上は身が直々に改めん」と、ずんど立てば操もせき立ち、「ヤア舌長したながなり傳藏殿、間狭まはなれども此屋鋪このやしきは弓之助が城廓じやうくわくならば手柄に踏込ふみこんでお改めあれ。女ながらも武士の妻、お相手に成りませう」と、云ひつゝ長押に掛けたる長刀、おつ取つて鞘振りはづし、小脇にかい込む身構みがまへに、さしもの蘆柄仰天あやうてんし、「ア、コレハ又短氣たんき千萬、改めて悪くばさう云うて濟む事、達てと申すでもござらぬわけ。誠息女が病氣びやうきならば、随分お氣を付け召され。縁邊えんべんの儀は又追

つて」と、始の擬勢引きかへて、挨拶さへもろくくくに、先がけられし目なし碁の、片手打たれし如くにて、すぐくとして立歸る。かくて時刻も押移り、常にかはつていそぐと、立ちかへる秋月弓之助。それと操は手をつかへ、「コレハく只今お下りか、いつにないお隙どり、御前の首尾はいかどでござります」と、尋ねに機嫌のうちにっこり、「イヤモ悦び召され、お上の首尾は極上々。此度國元の一揆を相鎮めし事、殿には一しほ御賞美あつて、先地の上に二百石の御加増。イヤモ殊の外の御機嫌にて、御悦びの盃まで下された。然るに大内家の家臣、駒澤次郎左衛門といふ武士、使者に來つて共に相伴、盃の取やりの内つくく見るに、人品骨柄天晴の若者、しかも文武兩道の達人なれば、殿も甚御賞美あつて、汝が娘の聲に致せよとの御意。かの駒澤も承知の體ゆゑ、諸士の手前面目是に過ぎず、御前に於て堅めの盃まで取りかはし申した。娘には過分の聲、おことも安堵しめされ」と、いふに操は、「ソナナラ殿様のお仲人で」「ヲ、サ大名のお仲人にて聲をとる娘は大仕合せ者、聲の顔を見をつたら、嘸悦びをらう」と、父の悦び母親は、娘の心はかりかね、案じる胸もそれぞとは、明けていはれぬ此場の思ひ、「イヤ申し我夫、殿様の御仲人とは申しながら、娘にもとくと云聞かした上で、云約束はなさらないで、あんまりさつきやくではござりませぬか」「イヤサ某も其氣のつかぬでは

なければ、御前の仰といひ、日本一の上々聲、拳を以て大地を打ちはずとも、娘の氣に入るは定（ぢやう）のもの、安堵（あんご）して娘に云聞（いひき）かせ召（めい）され。ヤレ／＼餘（あま）り悦（よろこ）ばしさに、思はず酒を過（す）し餘程（よほど）酩酊（めいてい）、ドレ暫時（さんじ）一休み」と、刀を提（さ）げて機嫌顔（きげんがほ）、居間をさしてぞ入りにけり。跡に操（みさ）はとやかくと、娘の心はかりかね、千々の思案（しあん）にくれ告（つ）ぐる、柱時計（はしらどけい）の音さへも、胸（むね）にどきつく物案（ものあん）じ、差（さ）うつむいて居たりしが、煙管（せんくわん）相手の獨言（ひとりご）、「今の夫（そつご）の詞（ことば）では、御上（おかみ）の御意（ごい）にかよつた縁組（えんぐみ）、娘思ひの我（わが）夫（つま）が、見極（みきは）めての云約束（いひやくそく）、鹿相（そさう）のあらう様（よう）はなけれど、只案（あん）じるは娘の事。いつぞや宇治（うぢ）の螢狩（ほたるがり）に、見初（みは）めた人は宮城阿曾次郎殿（みやぎあそじらうだ）と、娘に添（そ）はしてやりたいと思へども、肝心（かんじん）の所は賣僧（まいそう）者（もの）、どうぞ元の阿曾次郎殿（あそじらうだ）の行方（ゆくへ）を尋（たづ）ね、娘に添（そ）はしてやりたいと思へども、肝心（かんじん）の所を知らず、どうかかうかと思ふ矢先（やさき）、さしかよつた縁結（えんむす）び、一旦（たんぞく）夫（つま）が御前（ごぜん）にて、お受（うけ）申（まう）した上からは、今更（いまさら）どうも變（へん）がへならず。此上（こゝ上）は娘に譯（いひき）を云聞（いひき）かせ、得心（ごくしん）さすが上分別（じやうぶんべつ）。さうぢや／＼」と打（う）つなづき、「娘々（むすめ）」と呼（よ）ぶ聲（こゑ）に、「アイ」と返事（へんじ）はしながらも、晴（は）れぬ思（おも）ひにくよく／＼と、打（う）しをれたる娘の深雪（ふゆき）、奥（おく）より立出（た）で傍（そば）により、「母様何（ははさまなん）の御用（ごよう）」とうかどへば、母はにつこり、「チヲけふは髪（かみ）のかざりもけうとう好（よ）うできました。思（おも）ひなしか氣合（きあ）いもよささうで、マア嬉（うれ）しい。シタが娘や、今（いま）呼（よ）んだは外の事（こと）でもない、背（せ）たけ延（の）びたそなた、いつ／＼までも一人置（ひとりお）くは病氣（びやうき）

のもとゐ、それゆゑそなたによい聲を呼迎へる分別」と、半分聞かず、「ム、アノわたしにか
 へ」「チイなう」「イエ、わたしやチト様子有つて、殿御持つ事はいやでござんす」「チ、さう
 いやるは宮城阿曾次郎殿へ心底が立たぬと思やるか」「エ、」「サかういへば恟りしやらうが、
 いつぞや宇治の螢狩に、宮城阿曾次郎殿と云約束をしやつた噂は、娘どもにうすく聞及べ
 ど、云出すはけふがはじめ。どうぞ其阿曾次郎殿に添はしたいとは思へども、肝心の國所は知
 れず、何所を證據に尋ねうやうもなし。然るにけふ弓之助殿登城の折から、大内家より御使者
 駒澤治郎左衛門といふ人、器量骨柄揃ひし天晴の武士と、殿様には殊の外御賞美あり、秋月弓
 之助が娘に見合し、跡目相續させよとの御意。夫もよい聲と氣に入り、御受申して聲舅の盃
 まで取りかはして歸られ、娘にとくと云聞かし、得心させよとの、殿様のお仲人と云ひ、娘思ひ
 の爺御の氣に叶うた聲がね。様子といふは此事ぢやわいなう」「エ、そんなら殿様のお仲人で」
 ハアはつとばかりに心の當惑、何と返事をせん方も、なみださしくむばかりなり。「チ、顔を
 知らねば案じやるも無理ならねど、聲えらみの夫、何のそなたの氣にいらぬやうな聲をとられ
 う。殊にお上の御意のかよつた晴の縁組、今更變がへのならぬ聲殿、よう得心してお受申しや」
 「アイ」「ヤ」「アイ」「あいとばかりではすまぬわいなう。最前も意地惡の蘆柄傳藏が來て、是非

聾にならうとの押付業、おどしを見せて歸したが、お蘭の方へ云込んで、又どのやうな難題を云ひかけうも知れぬ。邪魔の入らぬ内縁組の取極が肝心。浅香とも談合して、今宵中に返事しや。可愛いそなたに何の悪い事すゝめうぞ。只何事も親々に任して、早う返事を待つて居るぞや。ドレ其間に我夫と祝言の相談せう」と、詞を盡し母親は、奥の間へ入りにけり。跡見送つて娘氣に、こらへくし溜涙、はつとばかりに泣きたさも、母に知らせじ聞かせじと、袖かみしめて忍び音に、絶入るばかり歎きしが、やうく顔を上へ、「エ、聞えませぬ母様、常々のおしめしに、貞女兩夫に見えずとの、教を守れとおつしやつた、そのお詞に引きかへて、阿曾次郎さんと私がわけ、知つて居ながら二人の夫、持てよとは胴欲な。どうした縁か知らねども、思ひ初めた阿曾次郎様、思ひきらうと思ふほど、いやます思ひ身の因果、生きてなま中うき事を、見んよりいつそ身を投けて、死んで未來で添ふが楽しみ。勿體ないは父上母様、先立つ不孝はゆるしてたべ。又二つには乳母浅香、此年月の養育の、恩もおくらず死ぬるのも、浮世の義理とあきらめて、堪忍してたもれや」と、いふもあやなき袖の雨、泣くく硯取出して、あかぬ別をする墨も、涙に薄き親と子が、歎きの種をまき紙に、書置く鹿の命毛も、やがて切れ行くはかなさに、筆の歩みも震はれて、はかどりかぬる文のあや、涙ながらに書きとど

め、封じふうる隙ひまも跡あと先に、心こころおくより聲こゑ高く、「御寮人様、深雪様」と、尋たずぬる乳母の淺香の聲、見咎みごめられじと文ふみさし置き、庭にはへおりしも夕暮ゆふぐれの無常むじやうを告つぐる鐘かねの數かず、六つ四つ五つとぶ鳥からす、かはいゝの聲こゑ々も、身みにしみ渡わたる秋の風、ふるふ膝ひざぶし踏ふみしめて、心も足も飛石とびいしづた傳たひ、裏道うらみちさし足落おちて行く。かくともしらず乳人淺香、手燭てしよくたづさへ立出たてでて、「深雪様々々々、深雪様はいづくに」と、云いひつゝ見廻みわうす料紙せうしのそば、落おちたる文ふみを取上とけて、何心なく見て憫びんり、「コリヤ深雪様の書置かき置き。奥様、申し旦那様」と、呼よはる聲こゑに弓之助、操も俱ともにかけ出でづれば、淺香はひろけし文ふみさし出し、「コレ申し深雪様が身を投なげるとの此書置このかき置き」と、半分聞はんぶんきかず、「ヤアゝゝゝ書置とは氣遣きづかひな」と云いひつゝ操はふみおつとり、「何々みづから事、宮城阿曾次郎殿と云いひかはしゝへば、二度の夫そとをむかへゝては、貞女ていぢよの道立ちがたく、不孝ふかうながら淵川ふちがはへ身を投なげゝ」と、讀よむ間まもせき立つ弓之助、「南無三寶なむさんぼうしなしたり。しかしかよわき女の足、遠とほくはよも落延おちのび、關助せきすけはどこにをる、早くゝ」にかけ來くる奴やつこ、「お旦那、何の御用でござります」「コリヤゝゝ、娘深雪が身を投なげんとて忍しのび出でしぞ、若黨下部わかつたうしもべに手分けして、跡あとを追おかけ取止とりどめよ」「エ、ソリヤ大變たいへん。かういふ内も氣遣きづかひな、朋輩ほうはいどもへは淺香どの云いひ付け召めされ。下郎げらうは直すに」と尻引しりひからけ、せきにせき助かけり行く、俄にわかの騷動さうどう泣なくにも泣なかれず、うつむく操

乳母淺香、弓之助も氣は顛倒、嬖はした若黨中間、呼びたてゝ家内中、上を三重下へとかへしける。

大磯揚屋の段

素見ぞめきでむく鳥が、むれつゝきつゝき格子先、叩く水鶏の口なめ鳥が、ヲ、ちつとも囀るまいとの春霞、諷ふ聲々浮立つて、たそや行燈の影光る、戀と情の中の町、分けて榮える松葉やの、座敷は絹でふき磨き、目を驚すばかりなり。此家の亭主仁左衛門、袴引上げ走り出で、「ヤレくゝいそがしやく、女子どもはまだ粧妝しまはぬかい。エ、べんくゝと埒の明かぬ。けふは助大盡の御趣向で、廊中の色達を惣揚にして、大踊りとの御注文。コリヤ女ども、花も生け直さし、爐の炭もついでおけ。コリヤくゝやり手ども、料理場の拵へはえいかと問へ。ヤイ男ども、藝者衆急ぎにいけよ。皆えいかく。ア、しんど、人を使ふのも大抵の事ではない」と、たくしかけたる八百萬、かみの鬚さへうなづくばかり、天窓振立てしやべりける。岩代多喜太奥より立出で、「ナント亭主、踊の拵へ諸事萬端、手つがひはよいか。大かた殿のお成りに間もあるまい、藝者太鼓を大門口まで迎ひにやりやれ」「ハイくゝ、そこに如才はござりませ

ぬ、モウとうに御迎ひに遣しました、頓てお出でござりませう。ドレ私は勝手へ参り、御着の指圖して置きませう」と、肩から爪の長廊下、すべりちらして走り行く。引違へて赤星運八、嚴つがましく入來り、「コレハく岩代氏、萬事御苦勞に存じます」「ヲ、運八殿、今日の役目御苦勞々々々、シテ放埒之助はまだ参られませぬか」「サレバく、大門口の茶屋で、彼傾城瀬川といちやくちやく。餘り埒が明きませぬから、身どもは先へ参りました」「ヲ、それこそ究竟、チト其元に申談する子細あれど、爰は端近、萬事は奥にて」「左様々々」と打うなづき、奥の一間へ入りにけり。ウタ誰も知るまい一人が中は、筆と硯が知るばかり。數多の藝妓に圍まれて、大内之助義興は、色と酒とに亂れ足、千鳥が崎の屋舗より、けふも廓の色通ひ、現たわひもなり振も、夫と多喜太は立出でて、「コレハしたり我君、明暮アノ掛物の繪の如く、引付けてござりながら、大門口のお契りは、餘り御念が入り過ぎました」と、いふに義興につこと笑ひ、「エ、不粹なことというなく。それは格別、聞けば國元から來た新參の田舎者、身に目見えを願ふ由、豫ての趣向の通り、踊最中へ呼出し、場うてをさすが一興。ナ、用意がよくば踊を始めいく」「ハ、ア、畏り奉る。しかし一家中の内より抽んで來る程の駒澤、もし御諫言申す時は」「ア、又しても諫めくと、此仙境へ通ひ初めては、釋迦如來が五百羅漢連れて來て

意見しても、けもない事く」「サ所を諫る臨機應變」「ア、くだいく、命のかけがへが二三
十あらば知らぬ事、慮外申さば、コリヤ五郎正宗」「ハ、ア天晴大丈夫。其お心を見る上は、太
夫どの始め拙者めまで安堵仕りました」「イヤコリヤ岩代、行燈より燭臺をくわつと點させ、踊
を始め、駒澤めを呼出せ」「ハ、ア委細承知奉る。ソレ女子ども、早く踊を始めさせい。家來衆は
駒澤を呼出し召され」と、いふに心得花車仲居、酒宴の設けとりぐに、既に踊を始めける。
ウツヤア面白の四季の眺や。春は上野の花盛り、雲にかけらふ兩國の、涼の花火星下り。秋は
賑ふ御殿山、山王堤に降積る、雪の景色も面白や。音頭を囃す三味太鼓、手振揃への花がさや、
かざす姿の花紅葉、お召によつて阿曾次郎、今は駒澤次郎左衛門と、名も改る曠小袖、おめず
臆せず入來れば、豫て指圖を受けたる踊子、右よ左とさゝゆるを、寄らずさはらずよけ通す。
夫と尻目にいは代多喜太、「駒澤殿、御前なるぞ、扣へさつしやえ」「ハ、はつ」と飛びしさり、
故實を正し平伏す。大内之助はもつれ舌、「駒澤了庵が跡目、次郎左衛門とはお手前な」「ハ、
ア御意の如く駒澤治郎左衛門め、初めて御機嫌麗しき御尊顔を拜し奉り、大慶至極に存じ奉りま
す」と相述ぶる。「ム、顔を上げい」「ハ、ハア」「テ、田舎者にはよい男ぢや。ヤイ儕此度参
りしは、予が遊興を諫言の爲か」「ア、イヤ全く以て」「然らば又何の爲」「ハ、ア恐れながら

申上げ奉る。此度伯父了庵病氣に付き、拙者に家名を譲り跡目のお願ひ、後室様の御免は蒙りながら、未殿様へ御目見え仕らねば、家老中へ願ひを上げ、是まで推參仕つてござります」アコレコレ、駒澤殿、鼠取る猫爪隠すと、詞を餌に殿へ取入り、古手な術の諫言申さうといふ下心で御座有らうがや」コハ迷惑なる御疑ひ、拙者の片田舎に生育ち、遊所とやら廊とやら、終に見たこともござらねば、一つには御目見えの御願ひ、又二つには暫時なりとも、君のお傍に相詰め、御酒のお間でも仕らば、生涯の本望と、お呵りも願ひす此の仕合。岩代殿何卒よきに御取なし、偏に頼み奉る」ヤ、コリヤ面白い。見事御身がお傍に相詰め、アノ御酒のお間をするぢやまで」イヤモ不調法ながら」と、案に相違の受答、工合違ひに岩代は、鞠れて詞なかりけり。大内之助は機嫌顔、「ホ、ういやつく。治郎左衛門盃くれう」「ハ、ハア」「アレコレ皆さん聞かしやんしたか、又諫言とやらでこはいめ見るのかと思うたに、テモ粹なお方。衣紋付なら物ごしなら、どこやらのお方とは雪と墨。ドレわしがお酌せうかいな」「エ、コレ逢坂さんのまんがちな、あなたが酌は此蝶山」「ハ、ハ、ハ、コリヤ最早悟氣か。取置いてつけ」「アイ。アイ。サア申し駒澤さんとやら、一つ呑ましやんせいな」「ハ、ア然らば頂戴仕る」と、猶豫もなく大盃、たんぶと受けてすつと乾し、「ハアなか」結構なる御酒、シテ此盃はいかと仕りませ

う」「テ見事ぢや、押よう」「ハ、ア、コハ有難き仕合」と、又引受けて呑みほす酒量。大内之助も興に入り、「テ扱氣味のよいやつ。馴染の爲其盃を多喜太へさせ」「畏り奉る。然らば失禮ながら岩代氏」「エ、めつさうなく。身どもは朝夕殿に付添ひ、榮耀榮花の酒びたし、餓鬼が水見た様に、此大盃では中々いけぬ」「ア、イエ、岩代様、殿さんの指圖、駒澤様のさよしやんした盃呑ましやんせねば卑怯でござんせう」「チ、さうでござんす。サア、太夫主の云はんとほり、卑怯云はずとおまへも一つ呑ましやんせ」と、無理につがれて顔しかめ、「エ、胴欲な者ども」と、つぶやきながら一口二口、「フル、中々むいきには呑まれぬはい」「ハハ、ハレ、口に似合はぬ弱いやつ。ヤイ駒澤、岩代が呑みかねを、何ぞ肴をして取らせ」「ハ、ア御意ではござりますれど、御前では餘り恐れ」「イヤ、苦しくない、サア、所望ぢやく」「ハア然らば御免」と立上り、扇をしやんと身の構へ。ウタ「テモ扱もわごりよは、踊子が見たいか、踊子が見たくば、北嵯峨へござれの。北嵯峨の踊は、對の烏帽子をしやんと著て、踊るふりが面白い。吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、戀しき人は見たいものよ。諸所お参りやつて、夙う下向召されと、かをゑちやか負うて参らしよ。ハ、ハ、ハ、尾籠の段は眞平御免下さりませう」「チ、中々出かすく。ナント太夫、よい酒の相手が出来たではないか。此上は奥座

敷でわつさりと呑直さう。駒澤も跡からこい」と、いふもしどろに立ち給ふ。岩代は佛頂面、「イヤ武藝の外は心がけぬ身ども、以後は舞でも稽古して、太鼓持の仲間入を致さう」と、何かなあたる惡體口。瀬川はそれと目配せに、新造禿は義興公、手引き袖引き奥の間へ、打連れてこそ入りにけり。照りもせず曇りも果てぬ春の夜の、月に榮ある庭櫻、そよ吹く風に誘はるゝ、花の吹雪を打興じ、詠め入つたる駒澤が、目元ちらつく酔心。こなたも同じ酒機嫌、所體崩して傍に寄り、「イヤ申し駒澤様、助様の無理じひで、お前も定めし酔はしやんしたであらうな。マア酔覺しに一ぶく」と、煙管にちよつと吸ひつけ煙草、是も勤の愛想かや。「コレハく忝い。當時全盛の君様が、お志の此煙草、イヤモ祿知行にも勝つた賜、取りあへず賞翫致す」と、押戴けば、「ホ、人術ながらした云ひ様。かねてお前は此里へ、忍びくに通はしやんして、多くの女郎衆に詩文の指南。助様へは沙汰なしに、私も拙い文章の、添削受けしこなさんが、初めてけふのお目見え。知らぬ顔はして居れど、日頃短氣なアノ殿様、ひよつと荒氣は出まいかと、心の内で幾瀬の案じ。されども物馴れたお前ゆゑ、酒ぶりやら舞の手で、それはそれはきついお氣に入りやう。是からとても、お傍放れず、お顔見せて下さんせえ」「コレハく御深切忝い。イヤモ萬事不骨の田舎者、お引廻しを頼み入る。ガそれは格別、イヤナニ瀬川殿、

そもじは眞實殿様を大切に思ふ氣か、若し又外より根引せうとあれば、其方へ行く心か、所存の程が聞きたい」と、様子ありけな詞とは、思へどわざとそらさぬ顔、「チ、駒澤様とした事が、私が氣を知つて居て、いろ／＼の探り言、殿様と私とは、初對面の其日から、水も洩さぬ二人が中、たとへ死んでも中々に、變る心はござんせぬはいな」「ホ、ヤあつぱれ貞女。其頼もしい心底を見込み、頼入れたき子細あり、何と頼まれては下さるまいか」「コレハ又改つたお詞、數ならぬ私なれど、身に叶うた事ならば」「アノ頼まれて下さるぢやまで」「チ、くど。さうしてお頼とはえ」「ホ、頼といふは外ならず」と、ずんと立つて床の間の、花生の櫻拔取つて、瀬川が前に差出し、「コレ此花は車返し、櫻の數も多き中、取分け人の賞翫するは、色香の妙なるばかりでなし、散らさば清き花の本性、譬へていはどそなたの姿。又アレアノ床の掛物は、定て聞きも及びつらん。唐土の玄宗皇帝、御寵愛の楊貴妃と、沉香亭に引籠り、しめてからんで横笛の、音に聞えし二人が中、天に在らば比翼の鳥、地に在らば連理の枝と、契り合うたる睦言も、果は馬鬼が憂き別。まづそのごとく此花も、千世も連理の榮をと、思ふにかひもあらしといふ、妨に逢ふ時は、枝に別れの落花微塵。アあつたら花を散らさうより、枝を分つて日陰に生けられ、仇に吹きくる嵐をば、よける思案が、サありさうなもの」「ム、そんなら連理の榮を捨て」「ホ、手打るとも人などが

めそ櫻花、けふばかりとぞ盛をも見め。サとつくりと思案して、車返しの其花を、散らすか咲かすか二つ一つ、マ色よい返事を待つてゐる」と、花に心をよそへ歌、詞殘して駒澤は、一間へこそは入りにけり。瀬川は跡を見送つて、暫し詞もなかりしが、花打眺め獨り言、「心ありけな花の譬、アノ掛物になぞらへて、ちらさぬ様との詞のはし、手折るとも人ながめそ櫻花と古歌を引きしは、ハテどうがな」とばかりにて、散りくる花の雪よりも、解けぬ思に打傾き、思案に暮れし折からに、禿しをりが走り來て、「申し、太夫様、助様がさつきにから、待ちかねてでござんす。早う座敷へ來なんせいな」「チ、嘸尋ねて居さんせう、ドレ行きやんしよ」とかい立てど、すまぬは胸の憂き思ひ、心は摸稜の手を引かれ、奥の座敷へ入りにけり。様子立聞く岩代多喜太、一間を出づればこなたにも、窺ひ出づる赤星運八、「岩代様」「シイ、聲高し運八。新參の駒澤め、てつきり諫言と思ひの外、踊狂うて俱に放埒、合點行かすと物陰より、窺ひ聞けば兼てより、此大磯へ入込み、瀬川とも馴染の様子、二人打寄りじやらりくらり、花の譬はどうやら氣ぶさい。いよく不義に極らば、こつちの爲には幸究竟、放埒之助に毒を吹込み、只一討にきやつが寂滅」「ム、成程々々、趣向の段取あつばれ妙計。ガ若し其手で行かぬ時は」「チ、其時は、コリヤかう」と耳に口、「ム、スリヤ松が枝より、油斷を見濟しどつさ

りと」「コリヤ必ずぬかるな」「合點」と、嘸き頷きひそくと、惡事に念を入れ智慧も、同じ穴なる狐武士、心おくの間奥庭へ、立別れてぞ忍び行く。一雙の臂は千人の枕と、賦せし詞の花に寢る、大内之助は熟醉の、胡蝶の夢や現なき。傍に瀬川は人知らぬ、心に思案ありを海、深き思ひにかきくれて、寢られぬ儘にかたへなる、硯引寄せ細々と、書取る筆の歩みさへ、強からぬ文の男文字、うゝに引かへて、浮世の義理にからまると、思ひは紙や知りぬらん。「しをりしをり」も忍び聲、アイと返事も長廊下、「おいらん何でござりんす」と、廓の訛も可愛らし。「ア、コレ大きな聲しやんな」と、云ひつゝ傍に氣を配り、何かひそくさやけば、うなづき吞込む氣轉者、袖に隠して走り行く。望月の、影に引くてふ夫ならで、闇を便の駒澤は、道の枝折を先に立て、瀬川に忍び逢ふさかの、關の角戸を押開けて、差足拔足忍び来る。それと見るより正體なき、殿の寢息を窺ふ瀬川、そつと立退き駒澤に、さよやき渡す返事の文、いつの間にかは岩代が、一間の内に窺ふとも、二人はいざやしら紙の、封押切つて口の内、讀めぬそぶりと岩代多喜太、「ヤイ不義者見付けた動くな」と、言ひつゝ一間を駆出づれば、二人は恠り大内之助、「不義者待て」と匆起きて、刀するりと瀬川が肩先、ばらりすんど切下けられ、アツとばかりに倒ると深手、見向もやらず短慮の義興、「駒澤覺悟」と切りかゝるを、飛びしさつて

身をひれ伏し、「此次郎左衛門毛頭不義の覺候はす。たつた一言申上げたき一儀あり、先々々々先々、暫くお待ち下されう」「ヤア言うな駒澤、先刻より空寢入して窺へば、予が目を抜いて文の取やり。不義でないとは案外千萬」「チ、サ、此岩代が見るとも知らず、はてくろしい不義密通。御手討は刀の穢れ、縛り上げて逆磔。ヤアく者ども、ソレ駒澤めを搦捕れ」「畏つた」と豫てより、木蔭に忍びの捕手の面々、十手打ふり駈來り、「腕を廻せ」とひしめいたり。ちつとも騒かずじろりと見やり、「ヤア仰々しい科人呼はり、ならば手柄に搦めて見よ」と、云ひつつ袴しほり上げ、待つ間もあらせす雙方より、小脇に組付く腕がらみ。「さしつたり」と振ほどき、右と左へづでんどう。續いてかゝる二番手が、打込む十手をかいくどり、ほぐれを付込む、瀧落し、庭へ散亂三番手、大勢一同に打込むを、四天拂にはらひ退け、秘術を盡す勵に、取りひしがれてさしもの捕手、たじろく透を人礫、ばらりく遙に投退け、「ヤア覺なき身を理不盡の御成敗、科極まらぬ其内は、めつたに繩はかゝり申さぬ」と、云はせも果てず岩代多喜太、「ヤアぬかしたり大盜人、不義の證據は是爰に」と、落ち散る一通差出せば、おつとり上げて義興公、開き見れども下らぬ漢文、「コハくいかに」と軋れ果て、暫し詞もなかりけり。手負は苦しき息をつぎ、「ナウ恥しや、假にも文のとりやりせしを、不義徒との御疑ひ、さ

らさら無理とは思はねど、勿體ないおまへを差置き、あだし心を持つやうな、此瀬川ではござりませぬ。コレとつくりと氣をしづめて、其文讀んで疑ひを、晴してたべ」といふ聲も、深手によわる息づかひ。岩代はせよら笑ひ、「ハ、ハ、ハ、工んだり拵へたり、ちんぶんかんの隠し詞、角字で紛らす手もある事。ヤア、お側付の儒者淺井順藏、此文體讀上けられよ。早く、と呼はる聲、ハツと答へて一間より、立出づる淺井順藏、件の文を取つて逐一に讀下し、「ム、スリヤ是唐土の楊貴妃が、馬鬼が原にて玄宗帝に別れたる、最期の故事をつどりし文章、不義の詞は曾てなし」と、聞いて驚く大内之助、「ム、シテ其子細は何とく」「ハアイヤ、恐れながら其申譯は駒澤めが仕らん」と、おめる色なく座に直り、某伯父の頼に依つて、國元へ下りし處、養父了庵我を招き、主君義興公、鎌倉にて御身持甚だ放埒、御諫言申す者は誰彼分たす即座の御手討、是皆國家を望む佞人のなす業、先達て藥王樹をかたり取られ、剩さへ靈府の尊像紛失、等閑ならぬお家の大事、汝、我名跡を受繼ぎ、鎌倉へ立越え、いかにもして我君に御諫言申し奉り、御本心になし參らせよと、くれぐれの頼みゆゑ、ハ、ア委細心得候と、夜を日に繼いで當地へ參著仕れども、佞人讒者の妨にて、御目通りも相叶はず。夫故忍んで廊へ立入り、詩文の流行、ヤ是幸と添削に事よせ、瀬川殿に對面し、心底をためし、先刻床の間の掛物と、車返し

の櫻を以て、歌になぞらへ無體の戀慕、心は命を所望の謎。それと悟つて禿を手引、忍ぶ此身は、ハ、ア勿體なや、假にも主君の思人に、不義と見せしも國家の爲、逢はゞ其儘差殺し、返す刀に切腹と、思ふに違ふ此文章。其身を捨てしは楊貴妃が、馬嵬が原にて最期の心、君の興を本國へ、車返しは國家の治り。ヤモ驚き入つたる秀作名文、遊女に稀なる心の操、君のお爲わざと御手にかゝりしは、譜代の臣が戦場の御馬先の討死より、遙に増る健氣の覺悟。ホ、出かされたり」と感賞の、水を流せる辯舌は、實類ひなき忠臣なり。聞いて手負は起直り、「ア、嬉しや本望や。申し殿様、疑ひ晴して未來は夫婦と只一言、いうて聞かして下さんせ」と、合す兩手に血の涙。義興公も不便さに、後悔涙の聲くもらせ、「ハ、ア我ながら誤つたり、駒澤といひお事まで、放埒情弱の義興を、大切に思ひ一命を投げうつての志、コリヤ嬉しいぞよ、過分なぞよ。其貞心を露程も、夫と知りなば討つまじきに。未來は一蓮托生」と、悔み給へば手負の瀬川、聞くに嬉しさ手を合し、「エ、有りがたや 忝や、其お詞が未來の土産、嬉しう成佛致します。お前は目出たう國元へ、車返しの櫻花、榮え給ふを冥途から、見るが此身の本望ぞや。とはいふもののお名残をしや、そも逢初めし其日より、比翼の床のさよめ言、連理とかはす睦言に、千代もかはるな變らじと、誓ひしこともあだし世の、義理ゆゑはかない此最期、娑婆と

冥途へ別れては、玉の簪を幻に、ことづてやらん傳もなく、嘸や輪廻に迷ひましょ。名残をしや」とはひ寄つて、覺悟極めし心にも、追女の愛著心、見上げ見おろす暇乞、あへなく息はたえにけり。義興公も今更に、不便の涙たちかね、こらへかねてはら／＼、漲る瀧津駒澤も、主君の心思ひやり、胸に満ちくる潦、袖に淵なすばかりなり。多喜太もどうやら底氣味悪く、此場黒める間に合詞、「殿、御本心に立ちかへり給ふ上は、我々までも大慶至極、此様子を帶刀殿へ相達し、俱に安堵をさせ申さん」と、詞巧みに云ひくろめ、やしきをさして立歸る。涙拂うて大内之助、「ヤア／＼駒澤、我國の主として、愚にも酒色にふけり、詩文の道に暗かりしは、他門の嘲り家名の恥辱、今より心改めて、汝を師範に儒學をはけみ、主従心一致して、寶の盜賊尋出し、誅をせんないかに／＼」「ハ、ア、ハ、ハ、ハ、ハ、コハ、潔き御一言、某君を守護するならば、國家に仇する佞人ばら、瞬く内に詮議して、二つの寶奪返し、成敗せんは手裏に在り。手始はまづ斯う」と、云ふより早く小柄の手裏劍、ねらひは松が枝どつさり、落つる運八拔討に、肩先ばらり大袈裟切。「ホ、あつばれ手の内、見事々々」早御歸館と供ぶれの、聲に随ひ數多の同勢、廣庭狹しと居竝んだり。「イザ御立」と駒澤が、進める詞に義興公、立出で給ふ御目にも、涙の玉やみつ瀬川、流れの里の泡とのみ、消えし命は色卽是空、花の姿も仇

嵐、散りゆく死出の山櫻、名残は跡に残れども、互に恥る主従が、心に數珠の車返し、花は櫻木武士の、道の道こそ三重かんばしき。

小瀬川の段

冬の夜の、月は老女の粧ひてふ、譬も凄き小瀬川の、入江の柳春待ちて、眉作れど彌寒き、風の手櫛にすきかへし、白粉ならで置く霜の、色もきらめく汀の岩、打寄る浪も氷居て、寒柱に下るばかりなり。在所親仁のほかくと、月夜に外間構はんばう、挑灯提けて繋きたる、渡海の船に打向ひ、「オ、イ五郎太船の婆様、今夜もどうぞ病人に、お守りを戴かしに來て下され、迎ひに來た」とぞわめきけり。斯くと聞きてや歩を渡し、船を出づるも杖突き乃、のりかひ著物綿帽子、漸に陸に上り、「チ、昨夜往た木村の衆か、まだ病人は本復さしやれぬか」「さればいの、タベ御守を戴かして下さつたので、よつ程驗が見えました。どうぞも一度戴かして下され」と、云ふに老女は、「チ、安いことく。こなたの娘に限らず、若い女子の病氣なら、戴かして進ぜう」「モ、マア佛氣な婆様、禮には小麥團子の雑炊、汗の出る程振舞ひませう。イヤコレ婆様、怪我さしやるな」と追従口、足元照す挑灯より、月夜に光る茶瓶天窓、打連れてこそ急ぎ

行く。跡へうろく二人の悪者、そこよこよと尋來て、「ヤイ權よ、爰にも幻妻はをらぬぞよ」と、いへば權七、「ハテめんような、慥に此道へうせた筈ぢやに、姿の見えぬは、ハテナア、どうでも此柳の様子では、幽靈であつたも知れぬぞよ」「エ、うそ氣味の悪いこといふない。どこの世界に紫縮緬の振袖著て、足のある幽靈があるものかい。一體おのれが間拔から、折角見付けた鳥を取逆したはい。アノことな大ならずめ」「何ぢや、ならずぢや。儂こそどうあはうの間拔ぢやはい」「エ、ほんくぬかしやモウやけぢや」と、つかみかゝれば我武者もの、組んづころんづ揉合ひしが、「いつそばらしてこまさう」と、腰なる刀に手をかくれば、「イヤこいつは面白いはい。ハ、ハ、ハ、コリヤ汝がどす開く間此手がじつとして居よかい。あんたらくさい、其頬けたを」と大だらを、抜けばこなたも抜合し、立向ひしが月影に、きらめく刃の尖さに、互にためらひ跡じさり、「ヤイくマア待て、マアまで。汝とおれが此所で切合つたら、どつちが死ぬるか知らねども、跡に残つた噂や坊主めが、けふは戻るか翌は戻るかと、待ちぼうけになりをるであろ。何と互に様子を書残して、其上で勝負せうかい」「チ、コリヤよう氣が付いた。しかしわりや紙や筆があるかい」「なうてかい、紙も矢立も爰に有るはい。ガ待てよ、始を何と書いた物で有らう」「ハテ知れたこと、覺一つと書けやい」「エ、何ぬかすぞい。

夫では受取のやうなはない」「そんなら待てよ、かうつと、一筆示しり。イヤそれでは姫の狀見だやうなとぬかすであらう。オットあるぞく、一筆啓上仕候」「エ、それでは年頭狀のやうなはない」「そんなら待てよ。チ、思ひ出した、まづ書置の事」「ム、成程えいは。其次は」「エ、我等事、我等事、此度商賣の人買出入に付き、切合うててこね申候。是まで人の物をいがみ候へば、どうで地獄へまかり申すべく候。どうぞ佛の手下になられるやう問弔ひ頼入申候。死ぬる此身は構はず候へども、跡々の飯米のこと氣にかゝり申し候。南無あみだぶく。何と哀れによう出来たではないか」と、云ふに勘太が涙ぐみ、「ア、よう出来たが、成程われがいふ通り、死んだ跡ではかゝや娘がひだるい目してほえるかと思や、おりや、おりや、いぢらしう成つて來た」と、聞いて權七泣出し、「チ、おれが鼻は惣嫁を引かして間のないに、此書置を見をつたら、又しやりに出にやならぬかと、ほえるであると思へば、おりや命が惜しうなつて來た」「チ、おれも死にとむない」「おれもく」と雙方が、酸漿程の荒涙、はらり、エ、はらくく、しやくり上げしは正眞の、鬼の目からの涙なり。「ナント勘太よ、おりやどうも死にともない。どうぞ助かりたいものぢやが、オ、有るく」「ム、有るとは」「サレバイヤイ、汝と中直りさへすりや死んでも大事なぢやないかい」「チ、ほんにさうぢやはい。そんならもう中よしと成つ

て、此邊を最一遍尋ねうか」「ア、さうぢやく。こんなよい智慧が初手から出たら、書置ま
でして泣くまいもの。下司の智慧は跡先に氣を配れよ」とうろく眼、風に騒ける磯際の、あ
しに任せて兩人は、左右へこそは尋ね行く。山鳥の、初尾の鏡影ふれて、見ぬ戀人と一すぢ
に、こがれくして身に積る、深雪はやしきをしのび出で、心急げど行きなやみ、石につまづき
打倒れ、暫しは起きも得ざりしが、やうく起上り、「ア、嬉しや、今の悪者の油斷の間に、
是まで逃けて來たれども、生きながらへては恥の恥、とても此の身はなき者と、死ぬる覺悟は
しながらも、心がかかりは母様の、事を分けての御意見を、聞分けぬのみならず、死ぬる私が不
孝の罪、逆様ながら一遍の、御回向頼み上げます。又二つには乳母淺香、嘸や夢にも現にも、
羣迷うて歎くである。死ぬる此身はいとはねど、跡の歎きを見る様な、ゆるしてたべ」と詫涙
「又戀しいは阿曾次郎様、此世の縁は薄くとも、未來は添うて下さんせ」と、さすがあどなき
娘氣に、親を思ひ夫をこひ、わつと泣く音に小夜千鳥、いとど哀を添へにける。風に音する古
木の柳、きつと見上げて打點頭き、涙ながらにかゝへ帶、結ぶかひなき惡縁と、恨ながらにと
くとも、枝に打ちかけ死ぬ覺悟、「なむあみだ佛」と聲もろ共、既にかうよと見えたる折から、
戻りかゝりし以前の老女、それと見るよりかけ寄つて、「コレ待つた、待たしやんせ」と、抱止

められて深雪は悲しく、「イエく放して、殺して」と、あせるを猶も押止め、「見れば若い女中のかちはだし、男故の駈落ちやの。夫なれば蒼の花をちらさうより、命さへ有るならば、戀しい人に逢はれまいものでもない」と、なだむる詞に涙ながら、「チ、よういうて下さんした。さりながら、やしきを抜けて出でながら、ふがひない女の身、所詮添はれぬ縁なれば、どうぞ死なして下さりませ」と、又立上るをしつかと抱止め、「ソリヤ悪い了簡。カウわしが止めるからは、こなたのしたふ戀人を、尋ねさがして逢はして進ぜう」と、いふに嬉しく、「エ、そんなら戀しいお人をば、尋ねて逢はして下さんすか。エ、嬉しうござんす、忝い」と、死ぬる覺悟も今更に、色に引かるゝ戀慕の闇、心迷ふぞ道理なる。かゝる所へ以前の惡者、たづね戻つてうそくきよろゝ蚤取眼、深雪の顔差覗き、「ヤア爰にをつたか、一遍と搜さしをつた。こつちへうせう」と手を取れば、老女は突退け深雪を圍ひ、「コリヤ此女中を何とするのぢや。女中こちへ」と手を取つて、行くを押止め立塞り、「どこへく、其幻妻はおいらの網にかゝつた鳥、脇目ふる間に逃けさらした。こつちへおこせ」と掴み付く、二人が腕首ぐつとしめ、はずみを打つて投付けられ、恠りしながら我武者もの、起上りて立ちかゝる、勘太が頼へびつしやりと、當る小判の一包、「アイタ、、、どえらい目にあはしやがつた」と、云ひつゝ取上げ、「ヤ

アコリヤ金」といふに權七手に取つて、「ム、コリヤ小判で十兩ばかり。エ、負けてこませ」と分口し、元來し道へ立歸る。老女は跡を打見やり、「テモ悪い者ども。シタガ十兩には安い物」「エ、」「イヤサ此間に早う」と手を引いて、袂より出す呼子の笛、ふつと一息吹きならせば、合圖と見えて元船より、苦押上げて掛けたる歩、深雪を伴ひ乗移れば、直に歩をてつ取り早く、碇引上げもやひを解き、權押取つて沖中へ、半段ばかり漕出す。折から砂道韋駄天走、宙をかけつてせきに關助、斯くと見るより聲をかけ、「オ、イ、其船待つた、待てやい」と呼べど叫べど聞かぬ振、窓より差出す深雪が顔、「ヤア娘様か」關助かと、云はんとするを引戻し、障子ぴつしやり跡しら浪。陸にはあせる關助の、後へぬつと權七勘太、折角かゝつたよい鳥は、手ごはい婆めに上げられる、せめて儂がわんほうを引剥いで腹いせ」と、取つてかゝるを引ぱつし、「イヤ面倒な」と拔打に、眞向なしわり拜討、倒るゝ死骸に目もかけず、心は彌猛いそ傳ひ、跡をしたうて追うて行く。

摩耶が嶽の段

雲霧とたな引きし、摩耶が嶽とて津の國と、播磨にまたがる高山あり。峯高うして雲に沖り、

谷深うして奈落に通ず。苔滑かなる岨道の、巖は鑿に削るが如く、常に馴れたる山賤も、足踏迷ふ嶮岨なり。かゝる深山の懷に、自然なる岩窟も、いつか住家となし初めて、住馴したる岩疊、岩の屏風に這ひからむ、葛の紅葉はさながらに、晝きなしたる如くにて、しをらしくも又物凄し。此家の主荒妙は、老の手業の手もたゆく、賤がうみ苧も髻の、白髪に紛ふ雪の朝、椿山茶花折持ちて、娘千里は立歸り、「申しかゝ様、けふは爺様の祥月命日ぢやと云はしやんした故、谷陰で折つて來たコレ此花、御前様へ備へて下さんせ」といふに老女は打點き、「チ、それはよう氣が付いた。おれが插さうより、そなたの手向が佛へ御馳走、佛壇へ立てておぢや」「アイく合點でござんす。シタガ申しかゝ様、アノマア浮洲はまだ戻らぬかいな」「チ、皆の者と夜山にいたが、まだ戻りをらぬ」「エ、テモ遅いことではある。此雪では冷えるであらう、早う戻りはしやらいで」「ム、そなたは何で浮洲の遅いを案じるぞ」と、咎められて氣轉の笑ひ、「ホ、ハ、ハ、アノマアかゝ様としたことが、色々の詞咎、召遣ひの人ぢやもの、ちつとは案じも仕ませうかいな。それはさうと、いつやら連れて戻らしやんした女中は、どこへ行かしやんしたえ」「エ、娘としたことが、様々の根問葉問。其女中は此間、播州邊のよい衆の所へ奉公にやつたのぢやはいの」「それはマアいといひ事、人も通はぬ此山中、遣ふ者としては荒

こましい男ばかり、折々は若い女子がくるけれど、いつの間にやら皆奉公。分けて此間の女中は媚も心もしをらしさうな人、よい咄し連と思つたに、是も又奉公とや。それならさうと暇乞でもして往たがよいに、聞えぬ人や」と恨言、女同士としてしをらしき。老女は聞くもうるさけに、「エ、かけも構はぬ他人の事、ぐどく」と云はずと、早う花を手向ておぢや」と、苦い顔付氣の毒と、千里は花を携へて、佛間をさして入りにけり。折しも雪道踏分けて、立歸つたる三人連、縛り上げたる里の子に、泣音を止める猿轡、或は衣類旅荷物、銘々かたけて内に入り、「ヤア頭、精が出ますの」「チ皆戻つたか、チト獵が利いたか」と、いふにかんまち猿、繩がらみ投出し、「イヤモ昨日からの大雪で、人通りはとんとなく、やうく」と向ふの村からうせをる奴、ヤこいつよい仕事と、稻叢蔭からオ、イくと呼んだら、サアふるひ出しくさる。しめたと思ひ引捕へたら、八十位の老耄め、引剥だ布子下著、帶は小倉の花色縞、まんざらでもなき」と、自慢らしけに投出す。次は山蛭洞八が、十二三な小女郎を突出し、「おれが帳場も人通りがなうて、どうやらこのがき一疋、豆腐買ひにうせたのを、引とらへて顔見れば、小しをらしい頬付ゆゑ、引かたけて戻つた」と、語れば老女は苦笑ひ、「エ、埒の明かぬつまみ錢。シタガコリヤ浮洲、われが仕事はどうぢやいやい」「イヤモ新米のこの浮洲、どうぞ頭の氣に入る

様なよい仕事と思へども、扱大雪でよい鳥もかゝらず、やうく山伏めを引剥いた兜巾襦袢懸數
 珠輪袈裟、夫から夜更けて長崎飛脚、迹足早う迹けをるを、追かけて引たくつた荷物の内に、
 人參が十四五兩、珊瑚樹が十二三、金が一步で十五兩、跡はござくがらくた物、帳合を頼み
 ます」と、一々縁に竝ぶれば、老女はそれぐ帳に付け、「チ、出來たく。エ、猿乞も山蛭も
 嗜めく。新まいの浮洲に花を取られるは、心がけが悪いからぢや。シタガ仕事はまん物、マア
 酒でも呑んで、晝の内は休めく」「オット合點ぢや」「マ、コリヤ又聲が高いわい。常からも云
 ふ通り、氣の叶はぬ娘ゆる、追剥の人買のと聞いたら、蟲が出るによつて、獵師商賣というて有
 る程に、わいらも随分知らざるやう、其ちつべいもいつもの鳥屋へほり込んでおけ」「オット合
 點夜通しに、ふるひ上つて陰囊を、猪糞炊焚き熱燗でも」情も知らぬ牛頭馬頭ども、泣入る小娘
 引立てて、勝手へこそは入りにけり。岩が根の、雪より忠義に凝つたる關助、深雪が行方爰か
 しこ、尋ねさまよひ思はずも、此岩窟に尋來て、斯くと見るより内に入り、「率爾ながら此家の
 内へ、年の頃は十五六で、やさしき方の娘御は、もし進退うて見えませなんだか」と、云ふに老
 女は心の合紋、扱は由緒の者なるかと、思へど慙とさあらぬ顔、「イエく、そんな女中は見受
 けませぬ。ガそれを何ゆる尋ねさつしやる」「さればさ、拙者は藝州福岡の者、子細あつて主人

の息女、若氣の至りにやしきを出で、其又翌日小瀬川で、ちらと見た船の内、呼べど叫べど届かぬ追風、モかいくれに見失ひ、それより陸を方々と尋ねるに、此麓の里人に問うたれば、エ、丁度其格好の娘を六十有餘の老女が連れて、此山中へ登しとの事故お尋ね申す。シテ此家より外に家でもござるかな」「チ、有るともく、アノ坂を左へ取り、十四五丁行けば獵師の家がある、そこへ往て尋ねさつしやれ」「ソレハ近頃忝い。氣急にござればもうお暇」と、たばかり工もしら雪の、道踏分けて尋ね行く。始終小陰に窺ふ手下、指足して、「コレお頭、今の奴が口ぶりは、どうやら先度の仕事を」「チ眼付けをつた様子、しかし家の無い山中へやつたれば、まひ戻つてうせるは定、足が付いては面倒な、コリヤわいら追付いて谷へばつさり」「チ、呑込んだ」と猿、山蛭もろ共關助が、足跡したひ追うて行く。引違へて出来る武士、門口に立止り、「荒妙殿在宿か」と、云ひつゝはひれば老女は不審、「ム、つひに見馴れぬお侍様、何方からの御越は。何はともあれマアく是へ」と請すれば、會釋もなく上座へ通り、「イヤ身どもは蘆柄傳藏とて、山岡立蕃殿に一味の者、則立蕃より密事の使者、委細の儀は書面に」と、取出し渡せば老女は受取り、「チ、是はマアく遠方の處、殊に難所の山坂を、御苦勞様や」と、云ひつゝ手紙取出し、封押切つて口の内、何か心に打點き、「ム、そんならお前も立蕃様と」「チ、

サ疾くより合體。身どもは藝州岸戸家の家中、豫て立蕃殿と心を合し謀反の密談、然るに駒澤了庵が養子治郎左衛門と云ふやつ鎌倉表へ参り、放埒の大内之助を本心に立歸らせし猿智恵、此奴いかなる術を以て藥王樹を奪返さんと計るまじきにあらず、萬事に心を配られよとの傳言「テ、成程此密書にも其事、ちつとも油斷は致しませぬと、憚りながら山岡様へ」「テ、サ、心得申した。ガ身どもは外に所用も有れば、最早暇申さう」「それは餘りおせはしい、何はなくとも御酒一獻」「ア、イヤ、又重ねて」と立上り、出るを見送る互の目禮、老女は一間へ蘆からも、二足三足立出でしが、何思ひけん小戻りし、内を窺ひ小點き、奥庭さして忍び行く。

摩耶が嶽の段 三段目の切

冬ざれば人目も草も、枯果てて、残るも淋しき軒の松、枝吹きならず雪嵐、いと寒氣ぞまさりける。納戸を出づる浮洲の仁三、寒さ凌ぎとるろりのそば、櫓打くべて御垣守、衛士にはあらぬ焚火より、戀ゆゑもゆる胸の火の、晝も消えざる物思ひ、娘千里は母親に、心おくより忍び出で、「オ、仁三郎いつ戻りやつた。昨夜はきつい大雪で、内に居てさへ寝ぐるしさ。モウわしやそなたのことを、案じてばかり居たはいな」と、詞をしほに寄添へば、色をふくみし雪の

梅、山の奥さへ浮世なれ。「チ、千里様、それはよう案じて下さりましたなう。ガこゝへ来て新米の此私を、しなつこらしう云うて下さりますので、蔭ながら悦んで居りますはいな。しかし夜持ぐ爰の商賣、雨降る晩や雪の夜でなければ、コレよい鳥はかよりませぬぞえ」「ム、アノ、夜さりでも鳥を取るのかや」「エ、お前も素人の娘か何ぞのやうに。コレ鳥といふはナ、人、アイヤやつぱり取りぢや。ハ、ハ、ハ、何がその鳥めが、雨や雪が降ると、聲山立てて人を呼んでも、イヤサ人を見ても、よう働かせぬので、モ取りよいといふこと」と聞いて千里は打しをれ、「いかに世渡るたつきとて、寢鳥を取るはきつい罪、もう是からはそんなこと、止めてほしい」と入譯を、しら齒娘の氣も弱く、耳を押へてさしうつむく。「ハ、ハ、ハ、氣の弱い。何ほ其様にいやがらしやつても、寢鳥は愚猪狼より恐ろしい事をする。コレ聲様をとらねばならぬぞえ、マチつと嗜んだがよござります」と、いふ顔じつと打眺め、「エ、いやらしい、そんな事聞きたうない。私が好の殿御といふは、ナ、コレ仁三郎、日外かゝ様が連れて戻らしやんした女中様、アノ子を頼んで文の數、返事のないはそりや聞えぬ。モ今更いふも恥かしけれど、人里遠き此内へ、初めておぢやつた其時から、いとしらしうてきつとして、明暮思ひ増すかどみ、紅白粉もどうぞして、そなたの心に可愛いと、思はれたさの化粧水、何といひ寄る詞さへ、灘

の鹽^{しほ}焼^やく下^{した}燃^もえに、こがれ暮^{くれ}して海^あ士^ま衣^{ころも}、なみだに筆^ねの濡^ぬ文^ぶも、戀^このいろはの手^て習^しに、袖^{そで}に付^つ
 くてふ住^す吉^{よし}の、神^{かみ}の御^み影^{かげ}の合^あす手^ても、嬉^{あは}しい逢^あ瀬^せを求^{もと}塚^{づか}、生^い田^たのもり^ものいくた^たびか、運^{はこ}ぶ心^こを
 ちよつとでも、汲^くんでくれたがよいわいな」と、男^{おとこ}の膝^{ひざ}に取^と付^けいて、赤^{あか}らむ顔^{かほ}は夕^ゆ日^ひ照^てる、摩^ま耶^や紅^{こう}
 梅^{ばい}の色^{いろ}盛^もり、花^{はな}も恥^{はぢ}らふ風^{ふう}情^{じやう}なり。「イヤモ、見るか^かけもない者^{もの}を、度^{たび}々^々の心^{こころ}遣^やひ、嬉^あしいけれど、
 お前^{まへ}は主^{しやう}なりわしは家^け來^{らい}、いかに商^{しやう}賣^{ばい}からぢやとて、主^{しやう}の娘^{むすめ}を盗^{ぬす}む、イヤサ、主^{しやう}の娘^{むすめ}御^ごと忍^{しの}び逢^あ
 ふも異^いなもの、あり様^{やう}は遠^{えん}慮^{りよ}して居^ゐました。ガ、眞^{しん}實^{じつ}思^しうて下^{くだ}さるなら、いかにもどうなとし
 ませうが、コレ、お前^{まへ}に無^む心^{しん}がある、ガ、何^{なに}と聞^きいて下^{くだ}りますか」「アノわしが願^{ねが}ひさへ叶^{かな}へてた
 もるなら、モどんな事^{こと}でも聞^きこはいなう」「ム、そんならアノ、かみ様^{やう}が大事^{だいじ}にしてゐるやしやる、
 女^をの病^{やま}を治^{ちやう}す守^{もり}、そつと見^みせて下^{くだ}さりませぬか」「ヲ、夫^そは安^{やす}い事^{こと}なれど、アノお守^{もり}は二^に重^{じゆう}箱^{はこ}に
 入^いれて錠^{ぢやう}をおろし、鍵^{かぎ}はかゝ様^{やう}が肌^{はだ}身^み放^{はな}さず持^もつて居^ゐやしやんすれば、首^{しゆ}尾^びを見^み合^あせ見^みせう程^{ほど}
 に、アノちよつと奥^{おく}の間^まへ」「ハテさうぢやと云^いうて畫^ゐ中^{ちゆう}に」「エ、マアコレ、ちよつとおぢや
 いの」と、無^む理^りに手^てをとる笹^{ささ}栗^りの、我^{われ}から落^おちて草^{くさ}の露^{つゆ}、濡^ぬれに行く身^みぞわりなけれ。折^をから
 坂^{さか}道^{みち}いつきせき、駕^かを昇^{のぼ}せて輪^わ拔^は吉^{よし}兵^{へい}衛^ゑ、遠^{えん}慮^{りよ}會^{かい}釋^{しやく}もあらくれ者^{もの}、雪^{ゆき}踏^ふみちらし門^{かど}口^{ぐち}より、婆^は様^{さん}
 内^{うち}にか、ちよつと逢^あふ」と、わめけば納^{なん}戸^どを立^た出^でづる、老^{らう}女^{にょ}はあたり見^み廻^{まわ}して、それと見る

より落付顔、「ナ、誰かと思へば輪拔殿、大きな聲で何事ぞ」「イヤ何事でもない、此中百
兩で値を極めて預つて往んだ代物、宥めても賺しても、たどめるく」とほえるばかり、勤
奉公はいやぢやと胴張り、間がな透がな辻支度、イヤモ顔に似合はぬしぶとい女郎ぢやはい
の。入込の内に取辻がしてはこつちの大損、事のないうち代物戻す」と、小腕取つて引出す
は、世にあき月の娘の深雪、泣きはらしたる目の内に、溜る涙の玉の緒も、絶えず重る憂き
思ひ、其儘庭に泣居たる。「エ、又してもく、いふ事聞かぬばいた女郎。コレ吉兵衛殿、折
檻して又相談せう。代りには不足なれど、ゆうべ手まへた小女郎め、行口があるなら頼みま
す」と、庭の小屋より以前の小娘、縄付の儘荒氣なく、引立て出して見せければ、輪拔じ
ろじろ打眺め、「ム、年は往かねどまんざらでもない代物、相談は後にして、マア預つて往に
ましよ」と、駕へほり込み先に立ち、泣入る深雪を瞰み付け、「むだ骨折したどう女郎」
と、諷きく立歸る。跡に老女が尖り聲、「エ、何所へやつてもほり戻されるしぶとい子や
の。小瀬川で身を投げうとして、死ぬる命を助けた上、大まい拾兩といふ金まで入れ、けふま
で養うた義理を忘れ、奉公いやがる恩知らずめ。賤しう育たぬやつと思ひ、手ぬるうすれば
付け上る、アノ爰な糟賣女めがうぬ。ア、コリヤもうそろく」と痛い療治をせにやならぬはい

の」と、焼返つたる圍爐裏の鐵橋、片手に握つて目先へ突付け、「サア、艾いらすのいつ灸、其美しい顔へするるか」「サアソレハ」「頬がまちを突抜かうか」「ア、コレ申し、どうぞ御勘忍」「サアそれ程に悲しくば、丸山へ賣られて行け」と、云はれて深雪は涙聲、「ナウ丸山とやらは聞及ぶ、唐土船の湊とやら。情なや唐國の人に肌身を汚さるゝ、君傾城の憂き勤、是ばかりは御了簡」「ア、ム、そんなら日向へ奉公に」「ア、コレ申し日向とは、夫よりも遙に遠き日の本の、果と聞けば猶悲しい。どうぞ都へ只の奉公、水仕の勤もいとひはしませぬ。お情お慈悲」とばかりにて、只手を合せ泣き居たる。「ホ、、、エ、味い事いふわろぢやはいなう。水仕にやつてはコレ、金にならぬはいの。コレくくよい子ぢや程に、アノ恩返しぢやと思つてナ、コレ此婆にまうけさして下されいの」「サアそれは」「但し此鐵橋が喰ひたいか」「ア、コレ申し」「いやかいやか」「何のく、何のいやと申しませうくくく」「サア賣られて行くか」「サアそれは」「サアサアく、いやなら殺すがどうぢややい」「ハア、」「サア返答せい女郎め」と、罵る聲は嚙付く如く、肝にこたへて此世から、奈落に沈む憂き思ひ、悲しさ怖さ恐ろしさ、涙は胸にみちのくの安達原の黒塚に、籠れる鬼の呵責にも、まさる責苦に堪へかねて、逆行く衿髪引戻し、邪見の老の皺腕に、引すり廻し責せつちやう、見かねて千里は走り出で、「エ、コレかよう様、餘

りぢやくく、餘りぢやはいの。いとほなけに此女中を、情らしう助けたの、イヤ命の親
のと言はしやんしても、君傾城に賣らうとは、よう胸欲に言はれた事。賣らいでならぬ事なれ
ば、かはりに私を賣つてたべ」と、縋り止めるをふり放し、「コレ娘、エ、そなたの知つた事ぢ
やない、そつちへ退いていやく」「ア、イヤく、何ほうでも此子を賣らさぬ、わしをく」と
争ふを、「エ、面倒な」と突退けて、かよわき深雪をちやうくく、焼鐵橋の續打、アット一聲
反返り、其儘庭へ倒れ伏す」「ナウいとしや」と泣入る千里、老女も今更詮方も、軋れ果てた
る折こそあれ、麓の方より手下の眼太、息を切つて駈來り、「イヤコレくお頭、大名の金飛脚、
此麓で追取巻き、まぶな仕事と仲間の者、汗水かけども手強い奴、どうやらこつちが覺束ない、
早う加勢」と言捨てて、飛ぶが如くに引返す。聞くより老女は胸り仰天、「浮洲は居ぬか」といふ
内も、老のいら立傍なる、心に覺えの一腰かい込み、裾ばせ折つて駈出づるを、「ナウ情な
や」と止る娘、引退けく力足、麓をさして走り行く。跡に娘はうろくと、あなたこなたを
氣遣ふ内、一間を出づる浮洲の仁三、千里は見るより、「チ、よい所へ仁三郎様、何やら事が起
つたとて、かゝ様は今麓へ。ガ、マア差當つて此女中を、どうぞ助ける仕様はないかなア」「サア
どうというて外に何にも。オ、ソレく、幸ひ頭の留守の間に、今の守をサアく早う」「ア

イアイ合點かてんも女房顔にようがほ、千里は納戸なんどへかけり行く。浮洲は深雪を抱だきかゝへ、胸撫むななでおろせば手に
 障さばる、守り袋まもりふくろの中改なかめ、「ム、藝州岸戸ぎしゅうきんこの家中、秋月弓之助が娘深雪、ム、」と心に一思案ひとしあん手早に納
 める程もなく、娘は守の箱携たづなへ、いそぐとして立出たちいづる。「サウぐどうやらかうやら取つ
 て來た、かゝ様の戻らしやんせぬ其中そのうちに、早うぐ」と手に渡せば、箱押取おつとつて恭うやしく、深雪
 が額ひたいに押當おしあてつれば、守の奇特きせき忽とに、息吹返いきふきかへし邊あたりを眺ながめ、「ヤアおまへは娘御」「チ、氣が付いた
 かえ、ア、嬉しやぐ。コレ幸さいひかゝ様は留守るすなれば、此間このまに早う行かしやんせ」と、聞いて
 深雪は飛立つばかり、嬉し涙にくれ居たる。「コレぐ女中、此坂を左へ取れば御影みかげへ出る近ちか
 道みち、頭かしらが戻らぬ其中そのうちに、サアちやつとぐ」に手を合せ、「忝かたじけなくうござんする、死しんでも御恩ごおんは忘れ
 じ」と、膝ひざもわなく立ちかねて、漸やう遁のれ落おちて行く。浮洲は守まもりに目も放さず、何思なんしひけん
 在りあふ鐵橋てつきう、取るより早く守の箱、はつしと碎くだけば驚く千里、見向きもやらず錦にしきの袋ふくろ、中よ
 り出づる狀取じやうと上げ、「ム、扱あこそぐ。山岡玄蕃やまおかげんぱんの内通ないつうの密書みつしよ、又此守こそ大内家の重寶藥王
 樹じゆ。扱あは主あるじの老女と云ふは、大友の殘黨ざんだう、謀反人むはんじんの同類どうるいよな」と、聞いて千里は、「何と云はん
 す、アノかゝ様を謀反人むはんじんとはえ」「ホ、先年玉橋たまはしの局つばねと偽いつはり、大内家へ入込み藥王樹かたまりを銜かた取り
 しは此家このやの老女、縁えんにつれたるお事なれば、妹背いもせの縁えんも是限り」と、詞尖ことばさきにいひ放し、一間ひきまの

内へ駈入つたり。娘は悲しさ「ハアはつ」と、其儘そこに泣倒れ、正體なみだの折からに、斯くとは知らず主の老女、心も足もいきせきと、我家の内へ駈戻り、破れたる箱を見て悔り、「アコリヤ／＼娘、大切なる守の箱、何者が此仕業、サア／＼子細はどうぢや／＼」と問詰められ、隠し持つたる懷劍を、咽にがはと突立てたり。老女は悔り其手に縋り、「コリヤ／＼娘、何故の此最期」と、抱きかゝへて介抱に、娘は苦しき息を繼ぎ、「ナウかゝ様、堪忍して下さんせ。語るも便なき事ながら、戀の媒頼んだる、義理を思つて最前の、女中を助けんと、仁三郎様の指圖にまかせ、大事の守を取出し、戴かせば忽に息吹返す卽座の奇特、幸ひ此場を落せしが、思ひも寄らず仁三郎様、守の箱を打碎き、中に添へたる狀を見て、情なやお前をば、謀反人の山岡とやらが同類とて、折角結んだ妹背の縁、切放されし其悲しさ。とても添はれぬ惡縁と、思ひ切つても切られぬ因果。かく成る事も大切な、寶を失ふばかりかは、大事を人に知らせたる、云譯なこの此最期」と、語るを聞いて老女荒妙、眼をいからし聲ふるはし、「ム、扱は浮洲の仁三といふは、古主の仇たる大内家の、廻し者であつたよな。それとも知らず氣を赦し、折角手に入る寶を奪はれ、現在娘を殺せしも、元の根ざしはアノ二才め。イデ搦殺して腹いん」と、身繕ひして荒々しく、一間の障子引明くれば、内にすつくと浮洲の仁三、以前の姿引

きかへて、進賢の冠、羅綾の唐服、寶を守護して立つたるは、股をくどりし韓信が、大元帥の位に著き、拜賀を請ぜし勢に、荒れし老女も氣を吝まれ、只茫然たるばかりなり。強氣の荒妙高笑ひ、「ム、くム、ハ、、、、ヤア納め過ぎたる汝が振舞、娘の敵寶の盜賊、サアくくく觀念せよ」と詰寄れば、ちつとも動ぜずはつたとねめ付け、「ヤア盜賊とは案外なり、疾くより入込む某こそ、浮洲の仁三郎とは汝を計らん假の名、誠は大内家の隨臣駒澤次郎左衛門が弟、同苗三郎春次なり。我幼年の頃、父了庵に勘當請け、成人に隨ひ先非を悔いて大明國へ押渡り、彼地の醫官とまで成りしかども、日本に在す父の慕はしく、仕を辭して歸朝せしに、父は早病死の跡、思ひ合せば先頃、多々羅の濱で怪しき老女、慥に藥王樹の盜賊、住家は摩耶と聞きしゆゑ、大友の殘黨浮洲の仁三と偽り、此家へ入込み今日只今、紛失せし藥王樹を奪返せしも娘千里が志、つれなき我に操を立て、生害せし貞心義烈、謀反の餘類と云ひながら、過分至極」と落涙を、聞いて老女は物をも云はず、持つたる脇差腹にぐつと突立つれば、「ナウ何故の御最期」と、取付き歎く手負の顔、打眈め涙を浮め、「エ、是非もなき御運の末。誠御身は我子にあらで、御主君大友宗鎮様の忘形見、菊姫君でござるはいの」「エ、」「チ、御合點の行かぬは御尤御尤。ア、思ひ出せば二昔、御父大友宗鎮様、足利の天下を掌握せんと、謀反の旗を上げ給ひ、討

手遅しと待つ所に、案に違はず大内義隆、手勢すぐつて三萬餘騎、豊前の國へ攻下り、小倉が城を取圍み、息をも繼がず採立つる。味方も爰を破られじと、矢種惜まず指しつめ引きつめ、射出す矢先は雨あられ、篠を亂して降るごとく、矢庭に城下は死骸の山、初度の軍は打勝ちしが、其後數度の合戦に、大將始め數多の軍兵、水の手切れて落城す。最期の際に宗鎮様、わらはを近く招き寄せ、其方何卒姫を伴ひ落延びて、命ながらへ守育て、成人の後は尼ともなし、父が菩提を弔はせよと、主命辭する所なく、漸城を落延て毒蛇の口をのがれしぞや。再び御世に出さん物と、海賊人買の惡業も、まさかの時の軍用金。又玉橋の局と偽り、藥王樹を奪取りしは、大内家を滅亡させ、二つには祈禱にことよせ、媚よき女を見置きては、手下に云付け拘引し、君傾城に賣渡せし、其罪科が報いゝて、姫君の御身の仇と成つたるは、皆わらはがなせし業、赦してたべ」と取付いて、悔み歎けば菊姫は、いと涙にむせかへり、「ナウ自ととも仇になしたる身の徒、そなたの最期も自ゆゑ。こらへてたも」とばかりにて、歎けば老女は猶せき上げ、「チ、よう云うて下さつた、翌をも知らぬ老の身の、死ぬるは元より覺悟のまへ。それに引きかへ姫君の、戀ひこがれたる其人に、一日片時添はしもせず、盛りの花をむざぐと、無常の風にちらすか」と、主従手に手を取りかはし、わつとばかりにむせ返れば、心を察し春次も、不便と見やる兩眼に、

たばしる涙はらくくく、ふり積む雪も一時に、解けて流れて谷川の、水も淵なす如くなり。
 斯る歎きもしら雪の、道を蹴立てて駈來る關助、庭先へ踊り入り、「ヤア我を欺き山路に迷は
 せ、討たんと謀りし狸婆、天罰報うてくたばつたか。深雪様を拘引し、何所へやつた。サア
 眞直に白狀ひろけ、何とく」と詰寄れば、三郎聲かけ、「先待たれよ。我こそは駒澤了庵が二
 男三郎春次なり。とくより此家へ入込んで、始終の子細は皆聞いた。御邊が尋ぬる深雪といふ
 は、我兄次郎左衛門とかねて縁邊の契約あること、某豫て聞及ぶ。最前守に書付有つて、秋月
 が娘とは察したる故、此家の千里と云合せ、都をさして落せし」と、聞いて關助小踊し、「ハ、
 有り難しく、お禮は重ねて。心もせけば早お暇」と、かけ行く向ふへ蘆から傳藏飛んで出で、
 「ヤア聞いたく。浮洲の仁三と云ふは大内家の浪人。此通り山岡殿へ注進」と、逸足出して
 駈行くを、エ、イと打つたる小柄の手裏劍、たじろく所を關助付入り、抜く手も見せず幹竹割。
 「ホ、ホ、潔よし」。山岡立蕃が逆意の企とくより夫と知つたれども、紛失したる靈符尊
 像、奪返すまで荒立てがたし。此密書を囑にして、立蕃を亡す我術。必ず堅固で、關助と、勇立つ
 たる其有様、手負の老女は聲を上げ、「オ、あつぱれく。ガ、只痛はしきは菊姫様、最期に婆
 が一つの願ひ、此世の縁は薄くとも、未來を結ぶ夫婦の盃、聞届けて下され春次様」「ホ切なる

老女が願に任せ、盡未來まで渝らぬ夫婦、半座を分けて待たれよ」と、詞に嬉しく二人の手負、手を合したる悦び涙。「ホ、其媒は此關助」と、心を汲取りかいけ杓、是や末期の水盃、冥途の旅へ嫁入の、儀式をまねぶ三々九度、苦しき中にもにつこりと、笑顔は娑婆の色直し、雪の白髪しらがの尉じようならで、姥うばもあへなく介添かいそへの、彌陀みだの淨土じやうどへいぬ張子はりこ、血しほの紅べにに染めてやる、野邊のの送火おくりびき消えはてし、草葉くさはの露つゆの玉たまの輿こし、あはれはかなき契ちぎりなり。

濱松の段

歌思ふこと、まよならぬこそ浮世うきよとは、誰が古への説言かこちごご、今は我身の上に降る、涙の雨の晴間はれまなく、哀あはれや深雪みゆきは數々の、憂うさ重りて目かいさへ、泣潰なきつぶしたる盲目まうもくの、力と頼む物とては、わづかに細き竹はその杖つゑ、あるにかひなき玉たまの緒をの、切れも果はてざる三昧しやみの糸、露命ろめいをつなぐよすがにと、背せに結ゆはひ懸かけしをくと、心の闇路やみぢたどりくる。跡に大勢里童きせりわらべ、てん手に竹切振廻たけぎれあいまはし、「アレく朝顔あさぎほの乞食こじきめ目くら、叩たたけく、打てよく」と取廻す。「ア、コレく目の見えぬ者を其様にはせぬものぢやはいな。どれもくよいお子様や、今度こんどよい物が有つたら上けうぞえ」「エ、いやぢやはい。乞食に誰が物貰ものもらふもんで、ナア次郎坊じろぼう」「チ、さうぢやく、あたぎ

たない乞食の物貰ふものかい。そんな事ぬかしたら、コリヤかうぢや」と惣々が、竹で打つや
 ら石打つやら、育も下司のわんぱくども、寄つて掛つてさいなまれ、「ア、コレく、モウ再び云
 やしませぬ、こらへて下され誤つた」と、土にひれふし詫びければ、「チ、泣いて誤るなら堪忍
 してやろ。サア皆こい、いつもの土手で芝居ごと、五郎よ、次郎よ」と呼連れて、道草しながら
 走り行く。跡に深雪はわつと泣き、「エ、浅ましや情なや、誰あらう岸戸の家老秋月弓之助が娘
 とも云はれし身が、いかに落ちぶれたればとて、筋目もない里の子に、乞食よ非人と打叩かれ、
 誤りましたは何事」と、身を抱しめてどうと伏し、詫涙ぞいぢらしき。願禮歌あら尊、導き給へ
 観音寺。遠き國よりはるくと、乳人浅香は浅からぬ、歎きも身にぞ笈摺の、深雪の行方尋ね
 んと、思ひ立つたる願禮も、辛苦憂き身のやつれ笠、露の舍も取りかねて、杖を力に歩み寄り、
 「コレく女中、率爾ながらチトお尋ね申したい」と、音なふ聲に泣顔隠し、「チ、コレハマア
 どなた様かは存じませぬが、私は目界の見えぬ者、ガ、マア何ごとのお尋ねぞ」と、云ふ物ごしの
 つまはづれ、どうやら尋ぬる其人に、似たと思へど形かたち、是は非人殊に盲目、心の迷ひと
 思ひ返し、「ホ、、、チ、わしとした事が鹿相な、目界の見えぬお人に問ふ事は異な物なれど、
 若し此街道を年の頃は十六七、媚容人に勝れ、やしき育ちの大振袖、供をも連れず只一人、通

られし様子^{ようす}をば、もし聞きはなされぬか」と、いふに正しく我身の上と、胸騒^{むねさわ}ぎしが待て暫し、世の中に、似た聲^{こゑ}の人似た事の、無きにあらずと思ひ返し、「チ、それはマア笑止^{せうし}な事や。往來^{ゆきき}も繁^{しげ}き此街道^{このかいどう}、女中の一人旅^{ひとりたび}は幾人^{いくたり}といふ限りなし。左様にお尋ねなされては、なか／＼知れう様^{やう}もなし。ガ、マア國はいづく、名は何と申しますえ」「サレバイノ、國は藝州福岡^{けいしゅうふくおか}、名は深雪様^{ふかゆき}」といふは彌乳母^{いようは}淺香、ヤレなつかしやと云ひたさも、落ちぶれ果てし今の身を、我と名乗^なるも面伏^{おもておせ}、殊にそれぞと云ふならば、連れていなれて父母に、どの顔^{かほ}さけてまみゆべき。罪深^{つみふか}き事ながら、偽^{いつは}りすかして歸さんと、猶^{なほ}しも聲をくろまして、「チ、成程、たしかそんな噂^{うわさ}も聞きたれど、其女中は國を出てより様々の憂目^{うれめ}に逢ひ、漸^{やう}のがれ此邊^{このへん}までは來られしが、どうしたとか四五日前に、淵川^{ふちがは}へ身を投^なげて、死なしやんとしたと人の噂^{うわさ}。假令^{たとへ}どの様に尋ねても、もう逢ふ事はなりますまい」と、聞いて淺香は、「ヤア／＼／＼、何其女中は身を投^なけて」ハア、はつとばかりに身を打伏^{うちふ}し、前後正體^{ぜんごしやうたい}なき居たる。深雪も共に悲^{かな}しさの、涙かくして傍^{そば}に寄り、「コレ申し女中様、悲しいはお道理ながら、老少不定^{らうせうふじやう}の世の習ひ、定りごとと諦^{あきら}めて、早う國へお歸^{かへ}りなされ、跡吊^{あとでら}うてお上げなさが佛^{ほとけ}の爲^{ため}。海山^{うみやま}かけし長の旅^{たび}、随分怪^{けが}我のないやうに」と、云ひつゝ立つてかけ小屋^{こや}へ、さぐり／＼て入りあひの、鐘^{かね}に哀^{かな}れ添へ

にける。跡に淺香はうつとりと、涙ながらの一人言、「エ、コレ申し、聞えませぬぞえ深雪様。家出なされしその時も、一言明して下さつたら、仕様もやうも有らうもの。ア、おいとしや奥様は、お前のことを苦に病んで、明けても暮れても泣いてばかり、果は重き病ひの床、死ぬる今はの際までも、どうぞ尋ねて連歸り、せめて位牌に無事な顔を、逢はしてくれよと私への遺言、夫故忌の明くをもまたず、國々廻る順禮も、おまへに逢はうばかりぢやに、なぜ死んでは下さんした。わしやお位牌へ云譯を、何とせうぞ」と身をもだえ、恨むる人は目のまへに、ありともしらぬくどき泣。聞くに深雪は身も世もあられず、袖をかみしめ耳をおさへ、泣聲立てじと喰ひしばり、こらへくし苦しさは、骨も碎くるばかりにて、泣くよりも猶つかりし。亂るゝ心押ししづめ、淺香は涙の顔を上げ、「ア、我ながら愚癡のいたり、いつまでいってもかへらぬ事、此上は菩提のため、打残りたる札所を廻り、早う國へ歸りませう。さうぢやさうぢや」と立上り、小屋の戸口にかけ寄つて、「イヤ申し女中様、いかいお世話でござりました。モウおさらば」とゆふ月に、別を告げて行過ぎしが、何か心に點頭きて、木蔭に忍び窺ふとも、知らぬ目しひの悲しさに、思はず小屋をまろび出で、乳母の行方はそなたぞと、見えぬながらに延上り、「コレイノコレ淺香、今云うたは偽り、尋ぬる深雪はわしぢやわいの。聲を聞いた其

時は、飛立つやうにあつたれどもな、あさまいくこの形で、ドウマア、顔が合はされう。とは云ひながらわしが身を、よくく大事と思へばこそ、海山こえて憂苦勞、廻りあひは逢ひながら、胴欲にもよそくしう、云うていなしした心の内、マ、ゝゝゝ、どの様にあるぞいの。只何事も是までの、約束事と諦めて、コレ堪忍したもくや。取分けて悲しいは、是程不孝な此わしを、やつぱり子ぢやと思し召し、身の徒を苦にやんで、お果てなされた母様の、死目にあはぬのみならず、御命日さへつゆ知らず、はかない事が、エ、マあるかいなう。思へばく淺ましや、親々の罪ばかりでも、目が潰れいで何とせう。赦してたべ」とばかりにて、こらへくし溜涙、わつと叫びて身をなけ伏し、前後正體なき沈む。立ち聞く淺香も忍びかね、わつと一聲泣出せば、扱はそこにと深雪が驚き、こけつ轉びつ逃行くを、縋り止めて聲ふるはし、「コレマアく待つて下さんせいなう。姿形はかはつても、一目にも見違へねども、名のりかけてもなかくに、明さぬ氣質と知つた故、餘所事に云ひなして、木蔭に隠れて始終の様子、立聞きしたも盡きせぬ縁。さりながら此年月骨身を碎き、やうく尋逢うたもの、心強いなさうとは、そりや胴欲ちやく。エ、聞えませぬはいなア」「エ、其恨は理ながら、今も今とて云ふ通り、身の徒で此様に、落ちぶれ果てた形かたち、どうマアそれと名乗られう。わしが心の

悲しさを、思ひやつてかんならず、呵つてたもるな誤つた」と、縋り歎けば、「チ、何のママ
 呵りませう。たとへどのやうにお成りなされても、廻り逢うたがわしや嬉しい。とは云ふもの
 の是は又、あんまりな落ちぶれやう、日頃の辛苦が思ひやられて、わしや〜此胸が裂けるやう
 にござりますはいなう。シタガコレ、お氣遣なされますな、私が産の親古部三郎兵衛といふ人、
 小夜の中山の邊にながらへて居さんすとの事。肌身放さぬ守刀、それを證據に廻り逢ひ、阿曾
 次郎様の有所を尋ね、きつとお逢はせ申しましょ。ガ、何をいうても此處は街道、宿ある方へ急
 がん」と、泣入る深雪いたはりて、立上る折こそあれ、夜道ほか〜輪拔吉兵衛、よい事がな
 と蚤とり眼、二人がそぶり物ぐさしと、傍へ立寄り提灯の、火影に深雪が顔打眺め、「ヨウ、わ
 りやいつぞや摩耶の婆に、百兩で直を極めた娘、いつの間に亂れてかくれにはなりをつたぞい。
 しかし醫者にかけたら治らぬ事もあるまい。何分元手いらすの勝負物、ドレ拾うてやろ」と手
 を取るを、淺香は引退け氣色をかへ、「ヤア女と思ひ、慮外しやると許しはせじ」と杖押取り、
 仕込みし刀抜きかくる、其手を押へて、「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、こりややい、輪拔吉兵衛というて
 な、日本國を股にかける人買商賣、鯉かきひねくり廻しても、びくともする男ぢやないは。ほ
 ろその下つた亂れせうより、賣られて絹のべゝ著い」と、てうける詞聞きかねて、「イヤ推參

な勾引、見事賣るなら賣つて見や」と、抜放して切込む刀、さしつたりと身をかはし、もう百年目と輪拔も、同じく旅差抜放し、「觀念せよ」と切結ぶ。深雪はあせれど盲目の、何とせん方なみ木原、二人は打合ふ月明り、こゝを詮とぞ三重挑みあふ。いかどはしけんわな拔が、石に躓き眞逆様、轉ぶを得たりと起しも立てず、肩背も分らぬ滅多切、さしもの惡者七轉八倒、のた打ち廻つて死したるは、心地よくこそ見えにけり。浅香はしつかと止めの刀、「サアく嬉しや深雪様、惡者はしとめました」と、いふ内よりも心のたるみ、其儘そこに倒れ伏す。深雪はこはごは探りより、勞はる手先にしたふ血、「ヤアくく、そなたも手疵負やつたか。なう悲しや」と抱きかゝへ、「浅香いなうく」と、聲を限りに呼生くれば、息吹きかへし目を開き、「チヲ深雪様、お身に怪我はなかりしか」「イヤくわしは何ともせぬが、そなたの手疵が氣遣ひな、氣を慥に持つてたも」と、取付き歎けば、「ア、コレ聲が高い。わたしはほんのかすり手、氣遣ふことはござりませぬ。が、もしもの事が有つた時は、最前申した古部三郎兵衛といふ人に、此守を證據に廻り合ひ、今宵の譯をお咄しあつて、何かの事をお頼あれ、必ずお忘れ遊ばすナ。ヤ、誰も見ぬうちサアお出」と、刀を納め深雪が背に、負はすも涙ふる三味の、いつかむかしにかへらう尾、いとどもつるゝ心をば、てんじかへても手疵のいたみ、盲目ならぬ我身さへ、

杖を力に立上り、女心も張りつめし、弓はり月に夜半の鐘、つくす忠義の一筋道、伴ひてこそ急ぎ行く。

宿屋の段口

行雲に足竝早き雲助が、拵ぎ隙なき東海道、傳馬人足歩荷物、吸付け歩む煙草さへ、五十三次打ちつゞく、中に賑ふ島田の宿、所名うてに内證よし、名さへ戎や徳右衛門、老舗も廣き十間間口、店は講札講印を、掛け渡したる暖簾も、風にひらめく吹付くる、繁昌類ひなかりける。逗留客の萩の祐仙、一間の内より歩み出で、「コレく女中衆、ちよと尋ねたいことが有る、ヤ外のこともないが、奥の客人は中國大内家の御用人方である。ソレなれば、萩の祐仙でござる、ちよとお目にかよりたいと申してくりやれ」「ハイく、呼びまして上げませう」と、お鍋は立つて入りにけり。斯くとしらせに岩代多喜太、一間より立出づれば、「コレハく岩代様、先以つて御健勝で」「テ、誰かと思へば萩の祐仙、久々對面。身どもに逢ひたいとはいかなる事」「サレバく、先達ての御狀にては、新參の駒澤が諫言にて、殿には御本心になられ、運八殿の最期の由、それに即立蕃様よりの御狀」と、渡せば受取り一見し、「テ、大儀々々。身どもとて

も何かに付けて邪魔になる駒澤め、何とぞ密に害せんと、昨日海道にて笹久藏といふ浪人を連れ
歸り、委細の密事を申含め、奥の間の下やへ忍ばせ置いた「ヤそれはよい手筈。もし其手でいか
ぬ時は、下拙が手製の、コ、コレ此痺薬を薄茶に交せて飲ます時は、忽ち五體しびれて死人
も同然、刺殺すに手間隙いらす。又此丸薬は則ち解薬、これを先へ吞置けば、少しも酔はざる
大妙薬。ガ、時に申さぬ事は聞えませぬが、首尾よう参れば御はうびを、ハ、づつしりと戴きた
う存じます」「チ、出かすく。先これは當座の褒美」と差出せば押戴き、「コレハく、忝い。
何かは後程」「チ、萬事ぬかりのない様」と、云ひつゝ立つて岩代は、元の座敷へ入りにける。跡
に祐仙獨笑、「旨いぞく、當座の褒美が先づ拾兩。さらば是から湯の仕掛」と、云ひつゝあ
たり見廻して、件の薬を湯の中へ、そつとほり込み蓋びつしやり、「斯うして置いて駒澤が、戻り
次第にふり立てて、我等が先へ服加減、解薬の丸子でしゝらしん、駒澤めは忽ちぐにやぐぐ
ぐにや」と、悦び勇む其所へ、奥より息急き下女お鍋、「申しく、奥のお客がお呼びなさる、早
う早う」とせり立つる、聲に恠り祐仙は、そしらぬ顔で奥へ入る。始終窺ひ徳右衛門、そろく
出でて跡打ながめ、「最前から様子を聞けば、何やら怪しいアノ薬、駒澤様へ申上けうか。イヤ
イヤ夫では却て當り障り、どうぞよい思案が有りさうなものぢや。オ、ソレヨ、昨日松原で買う

て置いた笑ひ藥、アノ鐵瓶の湯をかへて、オ、さうちや〜」と手早に懷中の、藥をふり込み蓋をしめ、「かうして置いてまさかの時は、オットよし〜」と、心で點き徳右衛門、勝手へこそは入りにけり。かゝる折から立歸る駒澤治郎左衛門、足音ソツトいはしろ多喜太、祐仙伴ひ出で迎ひ、「コレハ〜駒澤氏嘸御疲れ、先々是へ。イヤナニ祐仙、其方は平生茶好、定て茶箱も用意しつらん、ソレ駒澤殿へ一服立てゝ進ぜませい」と、云ふに祐仙空とほけ、「コレハ〜岩代様、私風情の麁茶を御所望とは冥加ない。殊にあなた様は『ヲ、サ、是が即駒澤氏、殿御歸國の先觸、宿々の駈引にて只今御歸宿、御遠慮深いお人、されども元來茶の道には御執心、用意の薄茶、サ、所望だ〜』『ハ、コレハ〜、なか〜あなた様へ上げますやうな茶ではござりませねど、御所望とは身の面目、苦しからずば何服なりと召上られ下されう』と、追従たら〜立上り、茶箱取出し毒藥の、工みの裏をかゝれしとも、知らぬ手前のしかつべらしく、振立てて差出せば、岩代多喜太詞を改め、「イヤ駒澤氏」と取次ぐ所へ、「ヤ先々暫く」と徳右衛門、「恐ながら」と座敷へ出で、「憚ながら旦那様、いかどしい申し事ながら、數代お出入の殿様の、御家來たるあなた方、私方で煮焚の物は、此度に限らず、吟味に吟味を致した上差上げませねば、千に一つ龜相がござりました時は、此徳右衛門めが越度、泊り合したあなたのお茶、サ御如才

の有らう様はなけれども、めつたには、ナ申し」と、目顔で知らせば岩代多喜太、「ヤアいらざるうぬが馬鹿念、身が入魂の萩の祐仙、茶に毒薬でも仕込みあるかと疑うて申すのか」「ア、イヤ、全く左様ではござりませねど」「ム、然らば差止めた駒澤殿の手前といひ、サ今一言いつて見よ、眞二つに打放す」と、きつば廻せば祐仙押止め、「ア、イヤ、先々お待ちなされませ、エエ貴公様の御立腹は御尤なれど、徳右衛門の申す所も又一理あり。ヤかう致そ、下拙が毒見仕り、其上にて駒澤様へさし上げませう。何と徳右衛門、それで云分は有るまいがや」「イヤモ御自分にお毒見なされる程、慥な事はござりませぬ」「チ、さう有らう。ガ、其替り何事もない時は、此祐仙が了簡せぬが合點か」「ヤモ夫はぜひに及びませぬ、御存分に成りませう」「チ、面白く。きつと詞をつがうたぞよ。ドレ毒味を致さう」と、茶碗取寄せ、そこらをきよろく見る振にて、解薬の丸子そうと呑み、さあらぬ顔して件の薄茶、雫も残さず呑み盡し、「チ、チ、チ、イ徳右衛門、ちよつと出やサ。見たか、此通りぢや徳右衛門。是でも別條が有るか、サどうぢや」と、己が工みの薬とは、取替へありとは夢にも知らず、「サア徳右衛門、ヤ戎や徳右衛門、えび徳、約束ぢや夫へ、ム、ム、ム、ム、直れく」「イヤモ段々誤り入りました、眞平御免下さりませ」「ヤ何ぢや、ム、ム、ム、ム、御免下されいも氣が強いわい。ハ、ハ、ハ、ハ、

ハ、、、エ、をかしないぞく。エへ、ハ、、、ハ、、、コリヤヤイ徳右衛門了簡ならぬぞ。
ハ、、、ハ、、、汝マア、是なりに濟まさう。ハ、、、ハ、、、あまりの事で腹がよれるは
い、ハ、、、ハ、、、一體こりや何のことぢやい。ハ、、、ハ、、、何ぢや知らぬが、無
性にをかしく成つてきたはい。ハ、、、ハ、、、アハ、、ハ、、、「岩代見かねて、「コリヤく祐仙、
をかしくもない事笑はずと、早く駒澤殿へ差上げぬか」「ハイ、ハ、、、ハ、、、成程々々、
ハ、、、ハ、、、只今差上げますはい。ハ、、、ハ、、、暫くお待ち下され。ハ、、、ハ、、、
ハ、、、ハテめんような。ハ、、、ハ、、、笑ふまいと思ふ程猶ハ、、、ハ、、、コリヤ
たまらん、臍が裂ける。ハ、、、ハ、、、「ヤイくたわけ者め、何が其やうにをかしい。
身どもは格別、駒澤殿へ無禮であらうぞ」「ハイ、ハ、、、ハ、、、左様にお腹は立てられな、
下拙も笑ひたいことはないけれど、ハ、、、ハ、、、何か腹の底から涌出るやうに、ハ、
ハ、、、ハ、、、是では徳右衛門へ押がきかん。ハ、、、ハ、、、ア、苦しい、堪忍してくれ、
誤ったく。ハ、、、ハ、、、イヤく心を取直し、モウ笑はんぞ。おれも男ぢや、笑はん
というたら笑はん、おれを誰ぢやと思ふ、萩の祐仙様ぢや。何のその、何ぢや云うて居るは、
ソナチやないく。ハ、、、ハ、、、コレく徳右衛門、中直りせう程に、ハ、、、ハ、、、

ハ、ハ、其替り醫者を呼んで、ハ、、、、ハ、、、、醫者が醫者を頼むは卑怯なれど、是はおれが手療治ではいかんわい。ハ、、、、ハ、、、、コリヤ何でも笑癢といふ物かしらん。ハ、、、、ハ、、、、コリヤ徳右衛門、もう何にも云はぬ、誤つたく。ハ、、、、ハ、、、、早う醫者を呼んでくれ、腹が立つ程をかしいわい。ハ、、、、ハ、、、、エ、忌々しいわい。ハ、、、、ハハ、、肺の臓も腎の臓も、腹の中で宿替するやうな。ハ、、、、ハ、、、、チ、イ宿替待つてくれ、付物の應對もせにやらん。ハ、、、、ハ、、、、コリヤモウ五臟六腑が、チヨイチよい踊り初めた」と、すり替へた藥故とはいざ知らず、果は茶箱も蹴ちらして、笑ひ入るこそ正體なき、姿に軛れ岩代多喜太、はかり戎や徳右衛門、をかしさ隠すばかりなり。短氣の岩代ぐつとせき上げ、「ヤア大馬鹿者の萩の祐仙、笑ひ止まらず手は見せぬ」と、力身かへれば恠りしながら、手を合しても止らぬ笑ひ、「ハ、、、、めつさうなく、ハ、、、、御オホ、、了、オホホ、、簡ム、、、、アハ、、、、」と、詫びる詞もあやちなく、笑ひ藥の利目とは、知らぬ祐仙息はずませ、轉けつ笑ひつハ、、、、逃けて行く。案に相違の岩代は、軛れ果てたる佛頂顙「エ、様々の馬鹿者にかゝり、湯に入るを忘れた。ヤイ亭主め、うぬよく邪魔を。ヤイきり／＼風呂へ案内ひろけ」と、それとも得いばずむしやくしや腹、席を蹴立てて廊下口、跡に心をおくの間

の、我座敷へと駒澤も、座を立つてこそ入りにける。

宿屋の段

何國にも、暫しは旅とつどりけん、昔の人の筆の跡、つれづれ詫びる假の宿、夜の襖のすきもりて、風にまたよく燈火の、影も淋しき奥の間へ、立歸る次郎左衛門、何心なく座をしめて、ふつと目に付く衝立の、張まぜの歌讀下し、「テ心得ぬ、此張まぜにある地紙の歌は、先年山城の宇治にて、秋月が娘深雪が扇に、某が、また逢ふまでの形見にと、書いて與へし朝顔の歌。其後計らず明石にて、船がかりせし其砌、琴に合はして深雪が節付、折ふし思はぬ互の出船、あかぬ別れを悲しみて、女の手づから我船へ、投込みし此扇。然るに今又此家にて、思はずも此張交。ア何者が諷ひ傳へて、計らず東の驛路に、見るもふしぎ」と獨言、其折からの忍ばれて、詠め入つたる時しもあれ、襖押開け徳右衛門、小腰かどめて入來れば、こなたも扇押隠し、「オオ亭主、先刻は扱もきつい働き、危き難を遁れしも、全くそちが志、サ是へく」「い、冥加に餘る御詞、エ、最前こなたへ參る砌、何か三人ひそく咄し、合點行かずと忍び聞けば、しびれ藥を茶に交せて、あなた様へ差上けんとの」「ア、コリヤ」「サア恐ろしい工み。エ、憎さ

も憎し、直に申上けうと存じたれど、それではどの様な科人が、出來うも知れぬと存じ、へ、幸先日慰に求めました笑ひ藥、ヤコレ幸としびれ藥と取りかへたを、知らずに呑んださつきの時宜、此後とても旦那様、御油斷は成りませぬぞえ」「オ、其儀は某もとく承知致した。マそれは格別、此衝立にある朝顔の唱歌は、何人の手跡、どういふ事からお身が手に入りしぞ」「エエそれでござりますか、其歌に付いて、ア哀れな咄し。エ、元は中國邊、歴々の娘さうなが、何やら尋る人があるとして、親元を家出し、それより方々と流浪して、果はとうく目を泣潰し、跡の月までは濱松邊に其歌を諷うて袖乞。所に又國元から、所縁の女子が尋ねてきて逢ひました、ガ、其女子も程なう病死。夫から又ひとり法師、此邊まで其歌を諷うて歩きましたが、何が盲目でこそあれ、器量はよし、聲はよし、見る程の者がいぢらしがり、朝顔々々というて、其歌を知らぬ者はござりませぬ。私も餘の不便さに、此宿に足を留めさせ、今では宿やゝのお客の伽、何とマア不仕合な者も有るものでござります」と、涙片手の物語も、心にひしひしとこたゆる駒澤、もし云ひかはせし我妻かと、轟く胸を押ししづめ、「ム、夫は扱哀れな咄。身も今宵は何とやら物淋しい、鬱散の爲其女を呼寄する事は成るまいか」「イヤモ何が扱お安いこと、只今呼びに遣します、お慰みに琴か三味」「ム、何分よきに頼み入る」と、云ふは子細の

有りぞとも、知らぬ佛氣徳右衛門、尻がるにこそ立つて行く。跡へ相役岩代多喜太、のさく
 と座に直り、「ヤ駒澤氏、嘸御退屈でござらう」「コレハく岩代氏、事の外お早いことでござ
 る」と、うはべは解けてもとけやらぬ、前垂がけの下女お鍋、次の間に手をつかへ、「只今朝顔
 どのが見えました、是へ通しましよかいな」「ナニ朝顔とは何者」「アイヤ此道中で琴三味を弾
 き、旅の徒然を慰さむる瞽女とやら。拙者も何か物淋しうござれば、ちと琴でも聞かうと存
 じ、亭主を頼み呼寄せましてござる」「アイヤそりや止めになされい」「トハ又なぜな」「サ
 レバサ、先刻身どもが知音たる萩の祐仙、同席いかどいはれた貴殿、乞食をば座敷へは通さ
 れまいかい」「ハテ高の知れた目くら女、まんざら怪しい、ナソレ茶箱も持参致すまい」と、し
 つべいがへしにぎつくりと、言句に詰まれどへらず口、「左程御所望ならば兎も角も、併しざし
 きへは叶はぬ、庭へ呼出し、琴なと三味なと弾かし召されて、早く此場をほつ歸されよ」と、
 飽まで意地持つねぢけ者、寄らず障らず駒澤が、指圖にお鍋が心得て、「朝顔どの召しまする、
 朝顔どのく」と、呼立つる。むざんなるかな秋月の、娘深雪は身につもる、歎きの數の重りて、
 塀失ふ目なし鳥、杖柱とも頼みてし、浅香はもう朝露と、消残りたる身一つを、さすがに捨
 てもえん先の、飛石探る足元も、危き木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、漸坐して手をつか

へ、召めしましたは此お座敷でござりますか、拙つたないしらべもお笑わらひ草ぐさ、おはもじさまや」と會釋あしやくする、顔も深雪はてがなれの果はて、不便ふびんの者やとせぐりくる、涙香なみだのみに込み扣ひかへ居る。岩代はそれとも知らず、「ヤア見ぐるしい其さまで、我々が目通りへうせたは、聞及きおよんだ朝顔めな。エ、きりりく立つてうせをらう」「アイヤく、岩代氏、さうもぎだうに仰せられな。此方に呼寄よびよせなければこそ、思ひがけなう、アイヤ思ひがけなう來たものを、呵しかるは武士ぶしの情なさけにあらず。コリヤく、女、大儀たいぎながら其朝顔そのあさがほとやらの歌、サ、早く諷うたうてきかせい」と、望のぞむ心は千萬無量せんまんむりやう。知らぬ岩代つら膨ふくらし、「扱々駒澤氏にはイヤモきつい御執心ごしん。コリヤく、目くら、何なりとも諷うたへく」「サ、早く早く」「ハイく、諷うたひまするでござります」と、こがるゝ夫そとのあるぞとも、知しらぬ目くらの探さぐり手でに、戀こひゆるゑ心つくし琴こと、誰かは憂うれきを斗ご爲み巾きんの、糸いとより細ほそき指先ゆびさきに、さす爪つめさへも八つ橋やっぺの、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇くもる爪つましらべ、ウタ露つゆのひぬまの朝顔を、てらす日かけのつれなきに、あはれ一ひとむら雨あめの、はらくと降ふれかし。「ム、夫そとを慕もつふ音律おんりつの、我々が身にも思ひやられて、思はずも感涙かんるゐ致した。ナウ岩代殿」「いか様、琴といひ器量きりやうと云ひ、イヤモ中々感心仕る。イヤナニ朝顔とやら、そこは定めて冷ひやえるであらう。身どもが傍そばで今一曲きょく、サアく、所望しよぼうだく」「アイヤ岩代殿、もう赦ゆるしておやりなされい」「さりとては駒澤氏、身どもが望もちむを

止めさつしやるは、ソリヤ意地の悪いと申すもの」「イヤさうではござらねど、彼も定めて勞れ
 ませうと存じて」「ハア、然らば曲は止にして。コリヤく女、そちも腹からの非人でもあるま
 い、身の上咄しも又一興、咄して聞かせ、サ、どうだく」「ハイく、よう問うて下さりま
 す、お詞にあまへ、お咄し申すも恥しながら、元私は中國生れ、様子あつて上方住居、過ぎ
 し卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、こがれよるべの螢狩に、思ひ初めたる戀人と、語らふ間
 さへなつの夜の、短い契りのほいなし別れ。所尋ぬる便さへ、思ふに任せぬ國の迎ひ、親々に
 いざなはれ、難波の浦を船出して、身を盡したる憂き思ひ、ないてあかしの風待に、たま／＼
 逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹分けられ、國へ歸れば父母の、思ひも寄らぬ夫定め、立つ
 る操を破らじと、屋鋪を抜けて數々の、憂き目をしのび都路へ、登つて聞けば其人は、東の旅
 と聞く悲しさ。又も都を迷ひ出で、いつかは廻りあふ坂の、關路を跡に近江路や、みのをはりさ
 へ定めなく、戀しく目に泣潰し、物のあいろも水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、いつの世
 いかなる報いにて、重ねくの歎きの數、憐みたまへ」とばかりにて、聲を忍びて歎きける。「テ
 扱哀れな咄し、併し男日照もない世界に、エ、氣のせまい女だな。イヤもうしゆんだ咄しで氣
 がめいつた、寢酒でもたへ氣を晴さう。イヤナニ女、暇をくれる、立歸れ」「ハイく、有り難う

ござります。左様なればお客様、もうお暇申します」「チ、朝顔とやら大儀で有つた。初めて聞いた身の上咄し、若し其夫が聞くなれば、嘸満足に思ふであらう。ノウ 岩代殿」「左様々々」「ハ、ア、是はマア御深切なお詞、有り難う存じます」と、杖探り取りながら、むしが知らすか何とやら、耳に残りし情の詞、名残惜しさに泣くくも、心は跡に探り行く。折しも奥より若侍、「最早餘程深更に及び候、御兩所共に早お休み」「いか様明日は正七つの出立、イザ駒澤氏、お休みなされぬか」「イヤ拙者は今暫し用事もござれば、お構ひなくまづお先へ」「ふせらう、御免下されう」と、立上りしが胸に一物、心を跡におくの間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遅しと駒澤は、手を打ならし女を呼び、「コリヤ、徳右衛門に急に對面したし、呼んでくりやれ」と云附けやり、旅硯の墨磨り流し、以前の扇押開いて、何か書きつけ用意の金子、藥の包、取認める目の先へ、疊を貫く白刃の切先、氣轉の駒澤有合ふ温湯、刀にそよけば血汐と心得、してやつたりと縁の下、壁踏やぶり顯れ出づる笹久藏、「覺悟ひろけ」と切付くる、刃を恐れぬ扇の茶碗の眼つぶし、たじろぎながら不敵の久藏、「覺悟ひろけ」と切付くる、刃を恐れぬ扇のあしらひ、廊下づたひに來かゝる亭主、コハ何事と窺ふ内、難なく刀打落し、取るなり切るなり途端の拍子、首ははるかに飛びちつたり。思はず知らず徳右衛門、「ヤレあつぱれ御手の

内。シタガ此奴何者でござります」「ホ、ウ某を欺討にせんと、飛んで火に入る夏の蟲。ハ、ハ、死骸はよきに頼み入る」「ハ、アお氣遣ひなされますな。ガ、只今召しましたは何の御用でござります」「テ、徳右衛門、折入つて頼みたきは、先刻の朝顔と云ふ女、今一應呼寄せてたもるまいか」「ハイ畏りましてはござりますが、彼は直に清水と申す方へ参りました、御用事ならば呼びには遣はしませうが、エ、どうで今夜はお間には」「ム、ハテ残念至極。身は正七つの出立、マよく縁の」「エ、何と御意なされます」「アイヤナニ徳右衛門、今の女に謝禮の爲、此三品を其方にしつかりと預け置く間、朝顔が参らば渡してくりやれ」「ハイハイ、オ、コリヤマアおびたどしいお金、其上結構な女子扇、お藥までも」「テ、サ、其藥は大明國祕法の目藥、甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、いかなる眼病も卽座に平癒。朝顔に渡してくりやれ」「コレハく、何から何まで、心をこめられた下され物、参り次第相渡し悦ばせましよ」と、受取る折しも時計の七つ。「ム、アリヤもう七つの刻限」と、かぞふる内に岩代多喜太、装束改め旅出立、同勢引連れ立出でて、「イザ駒澤氏、出立仕らうか」と、勧むる詞に治郎左衛門、衣服繕ひ立出づれば、見送る亭主が暇乞、心そくはぬ駒澤岩代、打連れてこそ出でて行く。跡見送つて徳右衛門、「ハア、同じ侍でも黒白の違ひ、意地く

ね悪い岩代に引きかへ、情深い駒澤殿、ア、あつぱれの侍ぢやな。ヤそれはさうと、朝顔に今夜の禮にはそぐはぬ下され物、ハア何ぞ様子の有りそな事」と、思案の折から、深雪は何か氣にかかり、座敷しまうてうとくと、又立歸る切戸の内、徳右衛門目早に見て、「オ、朝顔か、遅かつた。宵のお客様が最一度呼びにやつてくれいとおつしやつたれど、清水へ往たと聞いた故、お斷申したれば、今の先お立ちなされた。併しマア悦びや、大まいのお金と扇、又結構な目薬まで、わがみに遣つてくれいとお預けなされたはいの」「是は冥加に餘ること、お禮申さいで残り多い。ガ、申しくと旦那様、此扇に何ぞ書いてはござりませぬか、ちよつと見て下さりませ」「オ、ドレ、エ、金地に一輪朝顔、露のひぬまが書いて有る、裏に宮城阿會次郎事、駒澤次郎左衛門と書いて有るぞや」「エ、アノ、宮城阿會次郎事駒澤次郎左衛門と其扇に」「ナイ」「ハ、ア」はつとばかりに俄の仰天、「エ、知らなんだくくわいな。道理でよう似た聲と思うたが、そんならやつぱり阿會次郎様で有つたか。申しと旦那様、其お客様はいつお立ちなされたえ」「チ、今の先のことぢや。ガわがみは又おなじみか」「エ、なじみ所か、年月尋ぬる夫でござんすはいな。かういふ内も心がせく、追付いてたつた一言」と、行かんとするを引止め、「ア、コレくく、マアくく待ちやく。エ、折惡う雨も降出し、此暗いに一

人はあぶないく「イエくくたとへ死んでもいとひはせぬ」「サ、それはさうでも目
 くら身で、あぶないく」「イヤ放してく」と、突退け、刎退け杖を力に降る雨も、いつかない
 とはぬ女の念力、跡をしたうて追うて行く。名に高き街道一の大井川、篠を亂して降る雨に、
 打交りたるはたゝがみ、漲り落つる水音は、物凄くも又すさまじく、夫をしたふ念力に、道の
 難所も見えぬ目も、いとはぬ深雪が、こけつ轉びつ、やうく爰に川の傍、「ナウ川越達、駒澤次
 郎左衛門様と云ふお侍、もう川をお越しなされたかまだか、聞かしてく」と、いふ聲さへも
 息切の、聲に川越口々に、「チ、其侍は今の先渡つた。ガ、俄の大水で川が留つた。笑止々々」と
 ばかりにて、皆ちりぐに行き過ぐる。「ヤアナニ川が留つた。ハ、ア悲しや」と張詰めし、力
 も落ちて伏轉び、前後不覺に泣きけるが、又起直つて見えぬ目に、空をにらんで、「天道様、エ、
 聞えませぬくくはいな。此年月の艱難辛苦も、どうぞ最一度其人に、逢はしてたべと片
 時も、祈らぬ間とてもないものを、けふに限つて此大雨、川留とはく、エ、何事ぞいの。思
 へば此身は先の世で、いかなることを罪せしぞ、扱もくあぢきなき。こがれくた其人に、逢
 うても知らぬ盲目の、此身はいかなる惡業ぞや。夫の跡を戀ひしたひ、石に成つたる松浦瀧、
 ひれふる山の悲しみも、身にくらぶれては數ならず、三千世界を尋ねても、こんな因果が又と

世に、有るべきかは」とくどき立て、拳をにぎり身をふるはし、泣涕こがれ歎きしは、餘所の見る目も哀れなり。やゝあつて起直り、「オ、さうぢやく。とても添はれぬ身の業因、此川水の増りしは、所詮死ねとの事なるべし。未來で添ふを樂しみに、爰を三途の岸と定め、弘誓の船にのりの道、急がんものと、泣くくも、夫を戀しいしの數、袖や袂に拾ひこみ、「なむあみだ佛」の聲諸共、既に飛ばんとする所へ、「ヤレお待ちなされ深雪様」と、聲に悔りけしとむ内、駈來る關助徳右衛門、あわてし儘のかちはだし、斯くと見るより抱止め、「マアく、お待ちなされませ」「イヤく、誰かは知らねど、放してく」「マアく、待たしやれ朝顔殿。ヲヲわしもこなさんの身が氣遣ひさに走つて來た。コレ關助殿とやらが見えたぞや」「ハ、ア下郎めでござります」と、無理に手を取り抱退ければ、「ム、さういふ聲は關助か」「ハ、ア」「エエ遅かつたくくわいの。此年月の艱難して、尋ねこがれた阿曾次郎様に、折角逢うたに目くらの悲しさ、それとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣にかより、戻つて聞けばやつぱり其人。おのれやれ追付うと、跡追うて來たれば此川留。エ、どうせうぞいなうくく」「ヲ、お道理だくく。拙者めもあなた様の行方を尋ね廻る内、一昨日の夜の夢に淺香殿に逢ひ、則ちあなた様は島田の宿、戎や徳右衛門方にござると云はしやると思へば目が覺め、シヤ何でもふしぎ

と夜を日に繼いで参つたかひ有つて、すつてのことに危ない所を、ヤレ／＼嬉しや、下郎めがお目にかゝる上は、お氣遣ひなされますな、駒澤様に添はせ申す。併し淺香殿は坂東順禮と成つて、東海道へ尋ねて見える筈、がお逢ひなされしかな」「サレバイノ、其淺香に跡の月、濱松で廻り逢うたが、其夜惡者に出合ひ、數か所の手疵、死ぬる今はにわしを呼び、中山の邊には、私が産の親古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守刀を證據に尋行き、秋月弓之助が娘と名のつて逢へとをしへ、可愛やつひに死にやつたはいの」「ム、スリヤ淺香殿には最期とや」ホイはつとばかり驚く内、始終聞きゐる徳右衛門、「ム、そんならおまへは秋月弓之助様の御息女様、又淺香と云ふは我娘で有つたか。マア私事は、其尋ねなさるゝ古部三郎兵衛と申す者、則あなた様の祖父秋月兵部様には三代相恩、若氣の誤り奥女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助様に助けられ、女諸共國を立退き、産落せしが女子の子、貧苦の中に育つる内、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へ此短刀を添へて養子にやりしが、廻り／＼て思はずも、親が命を助けられし、秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れず導きをつたか。オ、出かしおつたな、此上は深雪様へ、三郎兵衛がお土産」と、件の短刀拔放し、腹にぐつと突立つれば、關助驚き押止め、「コレ、何でこなたは此最期、死んでお役に立つことか、譯を聞かして下

され」と、いへばくるしき聲を上げ、「ヤレ歎かれなかつた。最前駒澤様の物語、唐土傳來の目藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、いかなる眼病も卽座に平癒との事。某甲子の生れなれば、我血汐をもつて件の藥を調合し、早くあなたへお進めなされ。サ早くく」實もと關助用意の水呑取出し、手負の血汐受止めく、泣入る深雪が懷の、妙藥取出し差寄せば、深雪受取り、「わが夫の情にあまる賜」と、押戴きく、只一口に呑干せば、ふしぎや忽ち兩眼開き、蟻の這ふまで見えすくにぞ、深雪が嬉しさ人々も、悦び合ふぞ道理なり。「ア、嬉しや、最早此世に望なし。いづれもさらば」と刀引廻し、笛のくさを刎切つて、名のみ流る大井川、水の泡とぞ成りにけり。跡や枕に取縋り、わつとばかりに泣く深雪、「露のひぬ間の朝顔も、開きし此目は盲龜の浮木うどんけの、花に増りし夫の賜。二つには、我ゆる此世に亡き人か」と、取付き歎くを關助が、勇になき骸手舁の輿、早明け渡る鳥の聲、山田の恵いや増り、茂れる朝顔物語、末の世までもいちじるし。

歸り咲吾妻の路草

咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒がいさめば花がちるく、その駒澤を戀ひしたふ、櫻にあらで朝

顔が、姿も昔にかへり咲、髪も島田とたつか弓、引きも契らぬ海道に、誰も人目を大井川、跡に見附や濱松の、憂き艱難に引きかへて、昔語とあらひかへ、白すかかけて二川や、かいしよらしけにちよこくと、あゆみし姿も吉田御油、赤坂宿を打過ぎて、藤川繩手に休らひけり。「オ、ほんにわしとしたことが、夫に逢ふが嬉しさに、供も構はずうか」と、先へ歩むと思ひしが、此關助は何してぞ。オ、イ」と打招けば、跡におくれて關助が、雙紙の鎗をふりかたけ、「アリヤサ、コリヤサ、ヨイヤサ、とつかけべい、先退けろ。お鍋がかい餅ねれたら持てこい合點ぢや。ゆうべも三百張込んだ、してこいな、どっこい振れくふりこんだ。戀し殿御はあれでもないか、是でもないか。ナイくく。似ぬこそ道理違うたく、違はぬものは貞女と忠義、追付け廻りをか崎や、やがて鳴海」と關助が、縁起祝ひし言の葉に、深雪嬉しく、「オオ關助が遅かりし、そなたを跡にふり捨てて、歩むも女のまんがちと、嘸や心にをかしかる。面目ない」と詫言に、「何が扱く、拙者めもあなた様の御供申し、駒澤様と御祝言あるやうに、此跡の宿の氏神は、縁結びと聞きし故、心願こめて」「チ、それは嬉しさいながら、そなたもかねて知る通り、夫に添はれぬ因果の縁、死ぬる所を助かりて、二度東の我夫に、逢へばどうしてかうしてと、心はちどめもつれ合ひ、しめてからんだ松の蔭、其みどり子を産み落し、

ねん／＼ころゝんや、ねんねが守はどこへいた。どことは知れた其人に、逢うて恨をなんとまあ、どう云うてよからやら、なんとしやう野の憂き思ひ」「テ、お道理／＼。あなた様より關助が、三々くどうはござれども、追付け婚禮の取結び、其時髭めは晴奉公、ふり込／＼御祝儀の、なかに見事は花の鏝、駒の手綱をひかへづな、揃へやり持花の鏝、竝松の音もゆたかに、ザ、ンザ／＼、シャン／＼、しやんと納めた。ハ、ハ、ハ、勇み笑うて行く先は、伊勢路と伊賀の國境、榮え榮ふる坂の下、里の童が聲々に、「朝顔の、あしたに咲いて夕には、露の命も戀故ならば、わたしや厭はぬいとやせぬ。ソレ／＼／＼さうぢやいなく。朝顔の名にこそ立てれ幾秋も、ほんの心も色ゆるゑならば、わたしやいとはぬいとやせぬ。ソレ／＼／＼さうぢやいなく」諷ふ聲々身の上に、ひつしとおもひ石部川、花香もこもる梅の木を、たどりて急ぐ道の邊に、咲亂れたる朝顔に、むれ飛ぶ蝶のおもしろく、うかれ／＼て主従が、浪花路さして三重急ぎ行く。

駒澤上屋舗の段

浮める雲に譬へたる、不義の富貴に引きかへて、月日を擽ふ村雲も、今時を得て晴渡り、新に

造る普請の結構、玉を欺ぐ駒澤が、直なる心のかみやしき、殊に今日は殿のお入とさぞめいて、妃はしたとりぐに、掃除しまうて寄りこぞり、「コレ菊野、けふ殿様のお入とて、此様な結構な御ざしきを掃除して、きれいなことぢやないかいなう」「サイノ其きれいな、次手に、爰の旦那郎左衛門様、此廣い大阪中にも最一人とない器量よし。あんな殿御を夫に持つ、奥様になる人は、仕合せ者ぢやないかいの」と、ちよつと寄つても男の噂、口かしましきは端女の、習とこそは見えにけり。程なく殿様御入と、下部がしらせに、妃ども、「ソリヤコソお成ぢや、旦那様に、申し上げう」と打連れて、皆々奥へ入りにけり。大内之助義興は、さいつ比より東國にて、大友の殘黨を誅伐し、本國へ歸館ある。路次の序に駒澤が、上やしきへぞお成ある。お供には岩代多喜太、肩臂いからし入り来る、主駒澤次郎左衛門へり下り頭をさけ、「殿には益御機嫌よく御座遊ばされ、愚臣が弊居へお成とは冥加至極、有り難き仕合」と手をつけば、「此程大友の殘黨等、近國に徘徊致すよし、軍慮をめぐらし、只一戦に責討たんと評議まちく。汝も其旨相心得、一乘に勝利を得る術ありや、いかにく」と有りければ、岩代はしやくくり出で、「イヤく其軍あぶないく、大友の殘黨とて侮りがたし。今諸國へ討洩れたる殘黨ども、スハ合戦と聞くなれば、蟻の如くに集り、蜂の如くに起りなば、ゆよしき大事ならん。サ其時

には味方は小勢、譬へば鶏卵をもつて磐石を打つ様なもの、そんなあぶないことせうより、又大磯へ行つて傾城買が増であらう」と、己が悪事をしらばけに、大友一味の奸曲を、夫と駒澤心にうなづき、「軍の事は跡での評議、先今日は御鬱散を晴さん爲、奥の亭にて麴茶一服、獻上いたし奉りたし。いざく御入下さるべし」と、申上ぐれば義興公、しづく立つて入り給ふ。早日も西に傾きて、黄昏近き秋の空、心もいきせき關助が、忠義一圖に深雪をば、伴ふ心にいそぐと、やうく爰に著きにけり。關助は小腰をかどめ、「ハイ御免下さりませう、私事は藝州岸戸の家老、秋月弓之介が家來、關助と申す奴めでござります。殿方に御取次下されませう」と、云ふ聲漏れて治郎左衛門、一間の内より立出づる。見るに深雪は飛立つ嬉しさ、なうなつかしや我が夫と、抱きつきたさ今更に、邊りを見やりもぢくと、赤らむ顔の色も香も、盡きせぬ奇縁ぞわりなけれ。治郎左衛門打解けて、「イヤナニ、其方が聞及びし關助とやらか、長々の介抱何かの世話、ホ、過分なるぞよ。イヤナウ深雪、日外島田の宿にて、ふしぎと廻り逢うたれど、大切な殿のお供先、同家中の手前と云ひ、わざと其場は知らぬ體。シテ其砌徳右衛門を頼み、そなたに與へし樂にて、眼病も平癒せしか」と、云へば深雪は今更に、過ぎ來しかたの憂き艱難、思ひ出していらへさへ、涙先立つばかりなり。關助は引取つて、「イ

ヤモ、それに付けてもお咄し申上ぐれば長々しい事。仰の通り少しも違はず御病氣本復、其場所へ参り合せ、直様これまで御供申す。駒澤様の御きけんの體を拜しまして、下郎めは安堵、深雪様には嘸々お嬉しうござりませう」と、互ひに顔を見合せて、悦び合ふこそ道理なる。始終を聞いて治郎左衛門、「ホ、ウ是までかんなん辛苦して、廻り逢うたもつきせぬ縁、幸今日は殿のお成なれば、委細の譯を言上し、おゆるしあつた其上は、友白髪まで添遂けん。ガ、何かの咄しは身が居間で、關助共にまづあがれ」と、詞に二人が飛立つばかり、春待ちかねし鶯が、梅に初音の心地して、悦び入らんとする所へ、「ヤレマテ汝等、大内之介義興とくよりは是にて承知せり」と、悠然として立出で給ひ、駒澤に打向ひ、「イヤナニ、夫なる深雪とやらんは、岸戸の家來秋月弓之助が娘とかや、今改めて夫婦となさん、我目通りで祝言せよ。ソレく用意」と御下知に、はつと答へて持出づる長柄の銚子蝶花形、千代も變らぬ高砂の、尾上の松こそめでたけれ。悦び納る其所へ、様子をとつくと岩代多喜太、一間の内よりのさばり出で、「目くら乞食の朝顔も、今では武家の御内寶、前代未聞の此穿鑿。ドリヤ拙者も罷つて又後刻、御祝儀申さん駒澤殿」と、何がな意地持つ詞を残し、立歸らんとする所へ、「ヤアく大友一味の反逆人、そこ動くな」と呼びかけられ、恟りふり向く其所へ、「ヤアく治郎左衛門殿、暫くお控へ下さ

るべし。駒澤三郎春次、夫へ參つて明白に申上けん」と、云ひつゝ出づる若侍、見るより岩代詰
寄つて、「ヤア汝は幼少の時逐電したる駒澤了庵が實子庄一郎。シテ其方が證人とは」「ホ、ウ
某日外摩耶が獄にて、浮洲の仁三と假名して、大友に付隨ひ、術を以て打亡し、藥王樹を奪返
し、守護し奉りて國元へ立歸る其砌、播州舞子の濱の松原にて、山岡立蕃より、其方へ内通の
飛脚に出合ひ、しめ上げて狀箱引取り、よくく見れば汝が工み。又先刻其方が懷中より取落
したるコレ此一通、開き見れば山口へ合體したる惡事の次第、委細に知れたる此文體」治郎左「日
外島田の宿にて浪人を語らひ、下屋へ忍ばせ置き、毒藥を以て某を害せんと計る人非人、何と
是でも返答ありや」岩代「サアそれは」三郎「此書面の云譯ありや」「サア夫は」「サア、サアく
サア返答いかに岩代」と、流るゝ水の辯舌も、實に駒澤了庵が、子息とこそは知られけり。岩代は
破れかぶれ、「モウ是迄」と拔放し、切つて懸るを關助隔て、「駒澤様へ御目見えに、汝が首は此奴
が、婚禮の御祝儀に貰うてくれん」と立掛る。「ヤアちよこざいな一文奴、ばらしてくれん」と切
掛れば、こなたも心得渡り合ひ、暫く時をぞうつしける。先を取られて岩代は、たじろく所を付
け入つて、苦もなく首を打落せば、「ホウ出かしたく」。關助とやら、下郎ながらもあつぱれう
いやつ、以後は三百石を與へ、侍に取立てくれん。又庄一郎は今より、駒澤了助と名を改め、猶

忠勤ちうきんをはけむべし」と、残る方なき大將の、仰おほせに人々慶儀けいぎの感涙かんるゐ、智仁ちじん勇ある君子國くんしこく、例たとひを爰なほに竹本たけもとの、其一そのひとふしに千代こめて、語傳かたりつたへし物語ものがたり、文才ぶんさい青き翠松みどりまつ、かはらぬ色の若枝わかえだを、鳴ならさぬ御代みよぞめでたけれ。

生寫朝顔話終

大正十一年六月十九日印刷
大正十一年六月二十二日發行

有朋堂文庫
（非賣品）
淨瑠璃名作集上

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

編輯者

塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行兼
印刷者

三浦理

東京市神田區錦町三丁目九番地

印刷所

有朋堂印刷部

東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行所

有朋堂書店

不許複製

